



Title	近世ハンガリーの市場町社会 : 羊に纏わる風景を視座として
Author(s)	戸谷, 浩; Toya, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 43, 33-70
Issue Date	1996
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5243
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113402.pdf



近世ハンガリーの市場町社会

— 羊に纏わる風景を視座として —

戸 谷 浩

はじめに

近年、旧東欧諸国では、その民主化・脱社会主義体制の潮流の中でヨーロッパへの回帰といった傾向が、様々な局面において看取される。この傾向はハンガリー史学界にあっては、『ヨーロッパにおけるハンガリー人』と題された4巻本のシリーズの刊行というような形を取って顕在化してきている⁽¹⁾。しかしながら、この傾向はあくまで“回帰”なのであって、ヨーロッパとの係わりの中で自国の歴史を捉えてゆこうとする姿勢は、ハンガリー史学界においては、基本的に前世紀より一貫して継続されてきた立場であった。例えば、肉牛が近世ハンガリーから西欧諸国へ大量に輸出されていた事実、またそれによってハンガリーが西欧に対する農産物の供給地として「ヨーロッパ世界経済」の枠組みの中に組み込まれていった事実はつとに有名であるが⁽²⁾、これも本を正せばハンガリーと西欧との関係を重視する姿勢から生み出された結果の一つにほかならなかった。つまり、肉牛がハンガリーと西欧とを繋ぐ紐帯として暗黙の内に重要視されてきた経緯から、結果的にハンガリーにおいて肉牛に関する研究が数多く蓄積されることとなったのであった。

こうした、結果的にではあっても、ヨーロッパ中心的な発想が支配的な環境の中では、150年を超えるオスマン支配に関しても、次のような見解が一般に強く支持されるのである⁽³⁾。

「トルコ文化のハンガリー文化への影響を論ぜねばならない時、共生の期間と——無論強制的ではあったが——その強さを考慮しても、引用できる例のほとんど全ては瑣末で皮相な——遊び半分の試みと言うこともできる——ものである。そして、別の観点から迫る研究も、同様の結果に行き着くであろうことは間違いのないところである。(中略) このことはトルコ時代のハンガリー全体の教養や文化にも、実際当てはまるのである。ハンガリー文化は——あらゆる皮相な影響にもかかわらず——ヨーロッパ文化圏の有機的な構成要素であり続け、それ(ヨーロッパ文化圏——戸谷)に期待し、——国外の学校に通った青年たちを通じて——感化や衝動や手本をそこ(ヨーロッパ文化圏——戸谷)から得てきた。(中略) ……、(ハンガリー人とトルコ人の——戸谷)有意義な結び付きは、当然ながら、成立しえなかった。(中略) 本論の総括として次のことが断言できる。つまり、ハンガリーは、僅かのトルコ式浴場……や中欧においては一見の価値のあるものとされるトルコ風建築物、ハンガリー料理に入り込んだ美味しい料理、美しい花々やそれ以上に美しい伝説、そしてトルコの遺産の中で『利益をもたらす』要素というごく僅かの隙間に記載しうる全てのもののために、(支配・停滞という——戸谷)法外に高い代償を支払ったのであった。」

しかし、こうした生産力史観とも言うべき立場は、やはり150年という決して短くはない期間やハンガリー人、オスマン人の個人のレベルでの交際や日常生活を重視する観点からは、直ちに承服できるものではない。もちろん筆者は、ハンガリーがヨーロッパ史の構成要素ではなかったなどと主張したいわけでは決してない。ただ、史実に対しては常にバランスのとれたアプローチが不可欠であり、曲がりなりにも1世紀半に及ぶオスマン支配を被った近世ハンガリーに関する限り、オスマン社会⁽⁴⁾との接点を不当に軽視することは許されないことなのである。ハンガリー社会とオスマン社会との具体的な結び付きに関しては、西欧社会との繋がりやの解明に向けられる努力に相匹敵するほどの配慮が、本来は払われて然るべきなのである。

しかし、それでは、ハンガリー社会とオスマン社会の接点・公約数をどこに求めるかという問題になるわけであるが、ハンガリー社会と西欧社会を繋ぐ紐帯が前記のごとく“肉牛”であったことを考えれば、ハンガリー社会とオスマン社会を繋ぐ紐帯としては、同じ家畜でもある“羊”という存在のユニークさが際立ってはこないであろうか。本稿で検討する市場町ケチケメートに限っても、この羊という存在に纏わる風景は、飼養されていた羊の頭数、それを保有していた人々、羊飼い、毛皮加工師の同職組合、羊肉の供給・消費について、と実に様々に考えられる。以下、本稿では、これまであまり顧みられることのなかったこうした羊に纏わる風景を視座として、16世紀のケチケメート社会の全体像を再構成してみたい。

ハンガリーでも過去、羊に対して全く関心が向けられてこなかったわけではない。ただ、関心の方向が、タカーチ・シャンドル⁽⁵⁾に代表される民俗学・民族誌的な考察か、ブザ・ヤーノシュ⁽⁶⁾が精力的に行ったような農業経済史的な研究のいずれかに収斂される傾向が強かった。従って、そこで取り扱われたのは、羊飼いや牧羊に関する、時に瑣末とも思える事柄であったり、牧羊経営の具体的・実態的な把握に係わる論点が主であった。ただ、羊飼いの民族的な出自に関する論議は、小は経営形態論から大は文化・文明論にまで影響を及ぼすポレミックな問題であった⁽⁷⁾。これらの試みとは別に、大平原の都市や市場町の歴史を語る際には、牧羊についても触れられることが多かった⁽⁸⁾。しかしその場合にも、肉牛や馬に関する記述を“主”であるとするならば、羊に関するそれは必ず“従”の記述でしかないという憾みは常に残った。

史料に関しては、16世紀のケチケメートに関する限り、私信などの断片的なものを除くと、極めて限られたものしか残されていない⁽⁹⁾。本稿では、1546年・59年・62年のそれぞれの年に、オスマン政府によって作成されたブダ県の三つの検地帳(tahrir defteri)⁽¹⁰⁾と、前世紀のケチケメート史家ホルニク・ヤーノシュが集成したケチケメートに関する史料群⁽¹¹⁾を主たる史料として活用してゆきたい。

1. ケチケメート

ハンガリーの国土は、ドナウ川とティサ川によって三つの地域に区分される。この二つの河川に挟まれた地域のほぼ中央に、市場町ケチケメートは位置している。本稿の主題に入る前に、まずは、16世紀ケチケメートの全般的な状況について概観しておきたい。

今日、1520年代に始まるオスマン帝国の侵攻それ自体によって、ハンガリー中南部が一挙に潰滅的状况に陥ったとする考えは、ハンガリー史学界においては完全に退けられている⁽¹²⁾。ことに、村落自体の荒廃と人口の喪失とは相互に完全に区別されて論じられている。すなわち、荒廃を被らざるを得なかった地域の人々も、決してその全てが家諸共に殺戮されてしまったわけではなく、オスマン支配下の、あるいは域外のより安全な場所に移り住んで行ったに過ぎないと解されるようになってきているのである⁽¹³⁾。また、荒廃に帰した村落の比率自体も元々決して高いものではなく、1546年～1590年のブダ県でのそれは10%にも満たなかった⁽¹⁴⁾。しかも、放棄された村落の大半は戸数が数戸の小村だった⁽¹⁵⁾。

小村を放棄した農民たちにとって、“より安全な場所”の一つが市場町だった。ダーヴィドゥの算定によれば、ブダ県内で、非ムスリムの都市居住者の占める割合は、1546年の時点では25%であったが、1580年にはこの値が28%に上昇している。また、16世紀後半に関する別の算定では、ブダ州とテメシュヴァール州に属する15の県に居住する67,000人の世帯主の内、その22.4%に当たる15,000人が、当時、都市(市場町)に居住していたとされる。この数字には、主に都市に居住していたと言われるムスリム人口が含まれておらず、それでもなお、16～20%と推定される15世紀末の市場町居住者の割合を凌ぐものである点には留意しておきたい⁽¹⁶⁾。このように16世紀後半には、かつて地域の小中心でしかなかった市場町——カールマーンチェヒ、ラーツケヴェ、マコーなど——の人口規模は一樣に拡大し、その経済的地位も大いに高められていったのであった⁽¹⁷⁾。

こうした一般的な傾向から、当然、ケチケメートも無縁ではなかった。検地帳に示されたケチケメートの人口に関する数値を纏めてみると以下のようなになる(表1)。三様の統計値を掲げたが、これはカテゴリー(例えば、「世帯主」とするか「戸主」とするかなど)と個別具体的な分類基準の相違によるものであり、16世紀のケチケメートにおける人口増加の傾向は一致して明らかである⁽¹⁸⁾。メーサーロシュ・ラースローはこれらの数値等を基礎として、1580年代にピークを迎える16世紀後半のケチケメートの総人口を6,200～8,400人と推計している⁽¹⁹⁾。

表1 検地帳に記されたケチケメートの人口の推移

Káldy-Nagy	世帯主	未婚の息子	世帯主の未婚の兄弟	その他の未婚者	
Mészáros	戸主	息子	兄弟	家僕	計 (人)
戸谷	戸主	息子(未婚)	兄弟(未婚)	家僕(未婚)	
1546年	295	49	36	91	471
	278	57	50	92	477
	278	61(54)	48(36)	90(89)	477
1559年	407	71	9	5	492
	389	82	18	2	491
	389	74(68)	28(9)	2	493
1562年	400	286	38	34	758
	382	285	36	32	735
	392	285	36	35	748

Káldy-Nagy, 1546-1590, 347-350 old.: Mészáros, Kecskemét gazdasági élete, 200-204 old.: Káldy-Nagy, Kanuni devri, 328-335 old.; Idem, 1559. évi összeírása, 173-178 old.より作成。「戸谷」は後二者の史料からの筆者自身による算定。

ただ、ケチケメートに関しては、近隣の遺棄されてプスタ（puszta 荒蕪地）となった小村のいくつかは必ずしも 1546 年に初めて無人の地として記載されたのではなく、オスマン支配のごく初期の段階ですでに無人の地として記録されており、これらの地域からケチケメートへの人口流入をもって 16 世紀ケチケメートの発展を理由付けることは難しいように思われる。しかも、ケチケメート周辺の村落の世帯主人口の動態（表 2）からは、ケチケメートに接する地域の大規模な荒蕪というイメージは浮かび上がってこず、逆にこれらの村落からは、ケチケメートと同様に、伸長の気運さえもが窺われるのである⁽²⁰⁾（図 1）。表 2 において顕著な人口減少が窺えるのは、Jakabszállás と Kisszállás だけであった。

表 2 ケチケメート周辺の村落の家族数の推移

（単位：家族）

村名	1546年	1559年	1562年	1580年	1590年
Adacs	2	4	7	38	32
Alsóalpár	13	11	12	28	25
Alsófülöpszállás	—	—	10	11	11
Felsőalpár	24	18	23	28	24
Ferencszállás	27	23	29	39	22
Jakabszállás	9	9	6	7	1
Kerekegyháza	14	25	39	48	41
Kisbalázs	—	—	7	15	12
Kisszállás	20	17	23	17	5
Lajos	24	18	31	32	16
Mizse	39	26	33	42	32
Orgovány	7	4	6	10	11
Páka	23	20	39	47	39
Szabadszállás	—	11	37	50	48
Szentkirály	41	36	51	58	66
Szentlőrinc	33	17	44	45	37
Tatárszentgyörgy	6	19	29	32	24
計	282	258	426	547	446

典拠：Káldy-Nagy, Harács-szedők, 162 old.

ケチケメートを含む地域が大規模な荒蕪に晒され、ケチケメートが本格的なプスタ経営に乗り出すのは、十五年戦争（1591/93～1606年）以降のことだった⁽²¹⁾。この十五年戦争期には、ドナウ＝ティサ間地域で「三都市」と称せられたケチケメート、ナジケーレシュ、ツェグレードの人口さえもが激減した⁽²²⁾。いわゆる荒蕪地としてのプスタが市場町を取り巻くといった大平原に典型的な風景は、ここに至って初めて出来上がったのであり、ケチケメート周辺のプスタもこの時期に荒蕪・無人化したものが多いと言われている⁽²³⁾。

既知のごとく、ケチケメートの最大の産業は肉牛の生産と輸出であった⁽²⁴⁾。16世紀後半、年平均 6,000～8,000 頭に上ったケチケメートの肉牛の取扱い量を凌駕することのできた市場町は、ラーツケヴェとカールマーンチェヒの 2 市だけであったという⁽²⁵⁾。実際、1563 年 7 月 22 日から 1564 年 3 月 9 日までの期間に、ブダ北方のヴァーツを通過してドナウ川を渡河していった肉牛 30,248 頭のうち、1,661 頭がケチケメートからであり、この輸出総

典拠：Káldy-Nagy, 1546-1590, 付帯地図

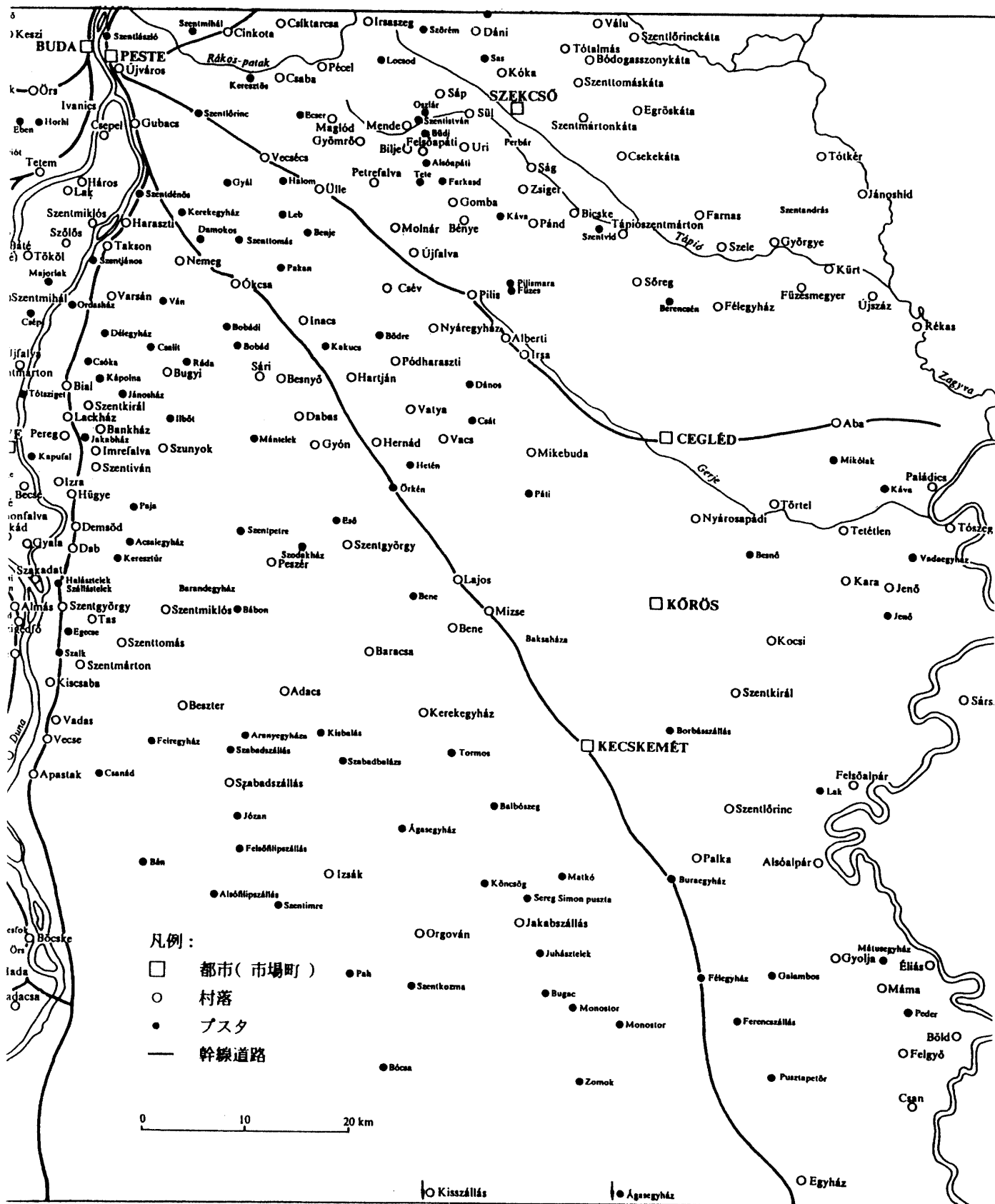


図1 ケチケメート周辺の村落とプスタ

数はマコー(3,175頭)、ヤースベレーニ(2,212頭)、デブレツェン(2,132頭)、セゲド(1,718頭)に次ぐものであった⁽²⁶⁾。

16～17世紀当時、ケチケメートの肉牛飼養は未だ舎飼を基本としていなかったために、肉牛の飼養には広大な放牧地の確保が不可欠であった。加えて、牧草地や耕地に対する需要も当然に存在していた。ケチケメートのこうした旺盛な土地需要に応えたのが、近隣の小村群であり、プスタであった。特にプスタは放牧の適地であり、牧畜を主産業とする市場町はこの種の荒蕪地を次々に借り受けていった。こうした方策によってケチケメートの肉牛輸出も着実に発展してゆき、町には多数の肉牛を保有する富農層が形成されていった。これらの富農層はザーヒンガズダ(záhingazdák)と呼ばれ、政治的にはケチケメートの市政を牛耳り、経済的には彼らこそが西欧に肉牛を輸出する遠隔地商人にほかならなかった⁽²⁷⁾。

オスマン軍の駐屯地とされることがなかったこともあり、16世紀のケチケメートに居住するトルコ(オスマン)人の人口は極めて限られたものであった。ただ、裁判や民政を統括するイスラム法官(カドゥ kadi)は他の主要都市と同様に、ケチケメートにも配置された。ハンガリーの支配地域に対するオスマン政府の政策全般にわたって言えることであるが、イスタンブルのケチケメートに対する要求は一般に寛容なものであった。租税徴収権や下級裁判権を留保できるほどの自治は、同時代のハプスブルク・ハンガリー(ハプスブルク支配下のハンガリー)やトランシルヴァニアの状況を考えても稀少な存在であった⁽²⁸⁾。留保された租税徴収権や下級裁判権は、判事(=首長 biró)と市参事会によって行使された⁽²⁹⁾。

また、徴税に関してケチケメートは、1565年にスルタンのハース(has直轄地)へと再編され、それに伴って租税の支払い方法も“定額納税方式”へ移行することとなった⁽³⁰⁾。高額に設定された税額を負担せねばならないこの納税方式ではあったが、同方式をとることによってケチケメートは、市政に対するオスマン政府の干渉をさらに減ずることができた。ケチケメートが高額の納税額を賄い得た最大の要因は、最盛期を迎えつつあった肉牛輸出産業を掌握していた点にあったが、個々の農民のレベルでは、租税負担に割安感のある同方式を採用することによって、肉牛飼養に必要な労働力が数多くケチケメートに流入してくることも繋がっていた⁽³¹⁾。1597年にはイスラム法官も召還され、ケチケメートの自治は新たな段階を迎えることとなった⁽³²⁾。

従来の西欧との関係を基本とした視点に留まるのであれば、16世紀のケチケメートの概観としては、ここで筆を置いても何らの問題も生じないはずである⁽³³⁾。しかし、近世のケチケメートは“肉牛交易都市”である以上に“牧羊都市”であった⁽³⁴⁾。多くの肉牛が放たれていた放牧地では、肉牛に加えて万の単位にも上る羊もまた草を食んでいたのである。

「はじめに」で触れたように、“羊”はケチケメートとオスマン社会とを繋ぐ貴重な紐帯であった。以下、この紐帯を手繰り寄せながら、ケチケメートのこれまであまり知られることのなかった側面を描き出してゆくこととしたい。そして、この作業を通じて、これまで一面的に過ぎたケチケメート像が幾らかでも補正されるならば、本稿の所期の目的は達せられたものとするのであり得るのである。

2. 羊の数

三つの検地帳には、世帯主の姓名の他に、(15歳以上の)未婚の息子の名、未婚の兄弟の名、家僕(牧夫)の名、書記・聖職者といった職業名、そして保有する羊の頭数が記載されている⁽³⁵⁾。バルカンに近い南部のセレームやセゲド県では、羊の頭数は村単位での総数が記載されていたに過ぎないので、ブダ県のこの三つの検地帳が伝える羊に関する情報は量的には格段に高められているとすることができる⁽³⁶⁾。数多い家畜の中で羊だけが記載の対象とされていることは、オスマン政府が羊の重要性を認知していたことを窺わせるが、当時のハンガリーにおいて最も重要な家畜とされる肉牛が個別に把握され、課税の対象とされていなかったことには多少の疑問も残る。この理由としてヘジ・クララは、当時オスマン政府が征服地の慣例を第一に尊重したことを挙げ、肉牛は旧王国時代においても課税の対象ではなかったがゆえに、イスタンブルはあえて肉牛から新税を徴収するような行為に出なかったとしている⁽³⁷⁾。

ブダ県の法令集(kanunnâme)によれば、羊に関しては、4匹ごとに1アクチェを支払う屠殺場税(resmi kanare)、羊税(âdet-i agnâmi)、子羊10匹につき1匹を供出する子羊十分の一税(ösür-i beresi)、他所で冬営した場合の羊囲い税(resmi ağıl)が規定されている⁽³⁸⁾。

三つの検地帳に記された羊の頭数は、表3に示す通りである。表3が示しているように、羊の頭数は1559年から62年にかけての時期に飛躍的な増加を見せている。

表3 三つの検地帳に示されたケチケメートの牧羊の概況

年	羊 (匹)			羊保有者 (人)
	成 獣	子 羊	計	
1546年	3,659	1,000	4,759	16
1559年	4,858	?	4,858+?	18
1562年	10,463	600+?	11,063+?	41

Káldy-Nagy, Kanuni devri, 328-335 old.; Idem, 1559. évi összeírása, 173-178 old.より作成。

牧羊都市としてのケチケメートの優越は、1546年と62年のブダ県内の各直轄都市の羊の保有数を比較すれば、容易に納得することができる(表4)。両年ともに、ケチケメートの保有数は、全都市の総保有数のほぼ半分に近い数字を記録している。ただ、ツェグレード、ナジケーレシュとケチケメートを比較した場合、1562年の1万匹以上の成獣を保有するケチケメートにおける子羊の頭数は明らかに過少の感がある⁽³⁹⁾。記載の上では600匹とされたケチケメートの子羊の頭数も、ツェグレードやナジケーレシュの数字を考慮するならば、実際には3千~4千匹程度であったと仮定してもあながち無理な想定ではないように思われる。従って、以上の算定を総合すると、1562年当時のケチケメートには、1万を超える成獣と3千~4千匹と推定される子羊を合わせた1万5千匹に近い数の羊が飼養されていたことになる⁽⁴⁰⁾。

表4 ブダ県主要直轄都市の牧羊の概況

都 市 名	1546年				1562年			
	羊 (匹)			羊の 保有者 (人)	羊 (匹)			羊の 保有者 (人)
	成獣	子羊	計		成獣	子羊	計	
Buják	50	40	90	1	65	60	125	1
Cegléd	1,856	2,100	3,956	14	1,194	3,000	4,194	8
Földvár	100	—	100	1	—	500	500	?
Kecskemét	3,659	1,000	4,659	16	10,463	600	11,063	41
Nagykőrös	—	1,350	1,350	?	1,979	2,500	4,479	7
Ráckeve	500	—	500	3	1,150	1,010	2,160	7
Tápiószecső	100	50	150	1	150	—	150	1
Vál	50	40	90	1	260	1,600	1,860	2
計	6,315	4,580	10,895	37	15,261	9,270	24,531	67

典拠：Mészáros, Kecskemét gazdasági élete, 85 old. 13. táblázat.

Kecskemétについては、表3に拠る。

さらに参考のために、ブダ県以外の県の大規模な市場町や城塞都市の羊の保有数を挙げてみると、次のような数字が得られる⁽⁴¹⁾。すなわち、セグド：28,167匹(1546年)、18,009匹(1560年)。ジュラ：1,153匹(1567年)、1,105匹(1579年)。ベーケーシュ：2,910(1579年)。ハンガリー側の史料(十分の一税台帳 *dézsmajegyzék*)からは県単位の羊の保有数を知ることができる⁽⁴²⁾。それによれば、ボルショド県：9,261匹(1576年)、9,626匹(1594年)、3,843匹(1598年)。ヘヴェシュ県：15,870匹(1549年)、24,279匹(1576年)、28,344匹(1583年)、1,900匹(1598年)。ビハル県：36,353匹(1588年)。個体の数え上げの時点での問題は幾つもあるだろうが、少なくとも1万を超える羊を保有する都市の、牧羊都市としての規模の大きさは、これらの数字の比較から窺い知ることができるであろう。

ところで、16世紀中葉のケチケメートには、セグドからの避難民が多数居住していた。セグドはハンガリー南部の旧国王自由都市で、牧羊経営の規模で、唯一ケチケメートに比肩しうる豊かな都市であった。しかし、セグドは1552年に町全体が大きな荒廃を被り、その際多くの市民が他の都市や市場町へと逃れて行った⁽⁴³⁾。ケチケメートに定住したセグド出身者は、聖マリア通り(Szenmária ucca)を中心に居を構え、ケチケメートの発展に対し多方面に亙って少なからぬ貢献を果たしたが、彼らの一部は牧羊にも従事していた。表5が示すように、ケチケメートの羊保有者と羊の保有数の10%前後は、共にセグド出身者が占めていた。第4節で述べる羊飼いの民族的な出自の問題といい、このセグドからの羊保有者の流入といい、ハンガリーにとって牧羊とはやはり、南に向かって開かれた日々

表5 ケチケメート在住のセグド出身者による牧羊

年	羊の保有者数 合計	羊の頭数 合計	セグド出身者			
			羊保有者	%	羊の頭数	%
1559年	18	4,858	2	11.1	600	12.4
1562年	41	10,463	4	9.8	1,140	10.9

Káldy-Nagy, Kanuni devri, 328-335 old.; Idem, 1559. évi összeírása, 173-178 old. より作成。

の営みにほかならなかつたと言うことができるのである。

3. 羊の保有者

次に、三つの検地帳に現れるケチケメートの羊保有者 (juhosgazdák) について見てみたい⁽⁴⁴⁾。表4に示した通り、ブダ県内の主要直轄都市に居住する羊保有者の三分の一ないし五分の二はケチケメートの居住者であったが、ケチケメートにおける各年の羊保有者名と保有する羊の頭数を一覧表にしたものが、次に掲げる三つの表である (表6～8)。

まず気付くのが、記載された羊の頭数は全て100頭以上であるということである。最少は100頭で、最高は1546年のKocka Imreの617頭である。1546年と59年の検地帳では、4名の羊保有者が重複しており、同じく59年と62年の検地帳では8名の重複者がいる。三つの検地帳全てに記載されている羊保有者はただ1名、Kocka Imreのみである。表1で示したように検地帳に記載された人数に関しては、研究者の間に若干の相違が存するが、いずれにせよ全記載者に対する羊保有者の割合は、各年とも、3.4%～5.6%の低率に留まっている。すなわち、100頭以上の羊を飼養していた人間は、当時のケチケメートにおいても、極めて限られた層に属していたことになる。

それでは、16世紀中葉のケチケメートの羊保有者とは、一体どのような社会層に属する人々であったのであろうか。まず言えることは、彼らは貴族ではなかつたということである。ケチケメートを含む大平原地域では、1541年の本格的なオスマン帝国の侵攻を前にして、貴族の大半はハプスブルク・ハンガリー領内に逃走していた。ケチケメートの有力者層が富裕化し、再び貴族の称号を得るようになるのは16世紀の最末期から17世紀中葉にかけてのことであった⁽⁴⁵⁾。

彼らが貴族ではなかつたということから、彼らを広い意味での農民、農業経営者にほかならなかつた商人層をも含むという意味での農民と考えると、彼らは階層化された16世紀ハンガリーの「農民社会」のいずれかの——あるいは複数の——層に属することになる。16世紀ハンガリーの「農民社会」の階層性についてはすでに多くの研究があり、階層区分の試論も幾つか提出されている。マイラート・ヨラーンは少し下った17世紀前半の「農民社会」を、「家畜値」(マルハサーム marhaszám) と呼ばれる課税指標を基に、農業労働者 (mezei munkás)、小農 (kisgazda)、富農 (cívisgazda) の各層に区分した⁽⁴⁶⁾。また、N・キッシュ・イシュトヴァーンは農民層を、貧農 (ジェレール zsellér)、小農 (pauper)、二分の一分与地保有農 (féltelkes)、富農 (gazdagparaszt) の四つの階層に分けている⁽⁴⁷⁾。彼は四つの階層の区分の目安をいくつか例示しているが、肉牛か馬の保有頭数で言うならば、1～2頭が貧農、3～4頭が小農、5～6頭が二分の一分与地保有農、7頭以上が富農であるとしている⁽⁴⁸⁾。さらに、16世紀のケチケメート自体を考察の対象としたメーサーロシュ・ラスローは、当時のケチケメート社会の階層性を、賃仕事者 (bérmunkás)、農民—手工業者—知識人の中流層 (agrár-ipari-értelmiségi középréteg)、家畜飼養者—大商人—プスタの借地人であるザーヒンガズダ層 (az állattenyésztő-tözsérkedő-pusztabérlő záhingazda-réteg) の3層に区分した⁽⁴⁹⁾。

ザーヒンガズダ層とは、先にも触れたごとく、経済的のみならず社会的・政治的にもケチ

表6 ケチケメートの羊保有者一覧(1546年)

姓 名	羊の頭数	家僕(牧夫)	息子・兄弟
Balázs	102	János	3
Becsi György	175	—	—
Bíró Dimitri	110	—	1
Csika Lázár	304	Gellérd, Miklós	—
Erdős Mihál	125	—	—
Ihász András	102	—	—
Kocka Imre	617	Lőrinc, Pál	1
Kocka János	300	—	—
Kovács Mihál	300	Miklós	1
Kovács Matiás	120	—	2
Márkus Balázs	335	—	1
Nemes Antal	220	Petri	2
Patai Ágoston	205	Benedek	—
Talódi Petri	204	Máté	—
Tok Bertalan	208	Gáspár	1
Vég András	232	János	2

表7 ケチケメートの羊保有者一覧(1559年)

姓 名	羊の頭数	家僕(牧夫)	息子・兄弟
Becsi György	300		Dimitre (息子)
Becsi Pál	200		—
Bíró Ferenc	350		—
Csika Lázár	304		—
Erdős Pál	350		—
Hajnal Orbán	200		—
Karácson Gergel	250		—
Kocka Imre	300		Gáspár (兄弟)
Kovács János	200		Pál (息子)
Mosa István	300		—
Pesti Sebestyén	200		Ferenc (息子)
Pető Dimitre	400		—
Pető Gergel	100		—
Szabó Petri	400		Matiás (息子)
Takács Benedek	250		—
Talód Petri	204		—
Tód Dimiti	350		—
Tód Ferenc	200		—

表 8 ケチケメートの羊保有者一覧 (1562 年)

姓 名	羊の頭数	家僕(牧夫)	息子・兄弟
Ágoston János	315	Miklós	2
Ágoston Mihál	197	1	1
Ágoston Pál	250	Máté	1
Becsi Ferenc	300	—	—
Bíró Ferenc	275	1	—
Borsos István	150	1	1
Bozók Ferenc	400	István, György	1
Csóka Pál	156	Anbrus	2
Ferenci Balás	100	1	1
Ferenci Demetör	200	1	—
György Matiás	250	1	2
Járfás Miklós	190	Mihál	2
Kalmár Matiás	100	1	1
Karácson Gergel	340	—	1
Kocka Imre	542	Gábor	—
Kovács Márton	100	1	1
Kövér Ferenc	210	1	1
Kőrös György	150	1	2
Márkus Tamás	350	1	3
Moksa István	405	1	1
Módva Eliás	400	1	1
Nagy Balázs	525	—	1
Nagy Máté	505	1	1
Oláh János	185	—	1
Pap Benedek	205	—	2
Petör Dimitre	150	1	—
Pető Gergel	100	—	1
Péter Mihál	200	1	1
Süveg Dimitri	600	1	1
Szabó János	300	—	1
Szabó Petör	400	—	2
Szana Benedek	?	—	—
Szana János	200	Márton	1
Takács Benedek	213	—	1
Takó Jakab	240	—	1
Tót Ferenc	200	—	1
Tót János	100	1	1
Tót Matiás	125	—	1
Tót Petör	425	1	—
Verös Petör	210	1	2
Vég Mihál	200	1	2

表 6～8 とも Mészáros, Kecskemét gazdasági élete, 86-88 old. の 14-16. táblázat を参考の上、Káldy-Nagy, Kanuni devri, 328-335 old.; Idem, 1559. évi összeírása, 173-178 old. より作成。

ケメートを牽引する立場にあった社会層のことである⁽⁵⁰⁾。彼らは税負担者の1～2%にも満たないほどの社会集団で、肉牛や馬をはじめとした商品生産を行ったり、それらの遠隔地交易を手掛けたりしていた。この階層には、メーサーロシュの指摘に従えば、富裕な肉牛や馬の飼養者、穀物生産を行う富農、遠隔地商人、大商人、プスタの借地人などが含まれるのであり、市政を預かる判事や市参事会員の大半はこの階層の中から選び出されていた⁽⁵¹⁾。

しかし、上記の列挙に見るように、羊の保有者はザーヒンガズダ層には含まれていなかった。だが、メーサーロシュのこの判断は妥当なものであり、そのことは次の事実からも確かめることができる。すなわち、現存する16世紀中葉のケチケメートに関する史料にその名が現れる判事などの都市行政の指導者13名のうち、オスマン帝国の検地帳上でその名を同定しうる者は11名であったが、そのうち羊の保有者として記載されている者は僅か3名に過ぎなかった。近親者に羊保有者がいる者を含めても、都市行政の指導者であって、同時に羊の保有者層にあったと断定しうる者は4名に上るに止まった(表9⁽⁵²⁾)。この4名は、総計63人に上るケチケメートの羊保有者(表6～8)の中からの4名であり、財力のあるザーヒンガズダ層が肉牛飼養と併せて牧羊経営をも手掛けていたことを想定するならば、羊を主として飼養していた人々の割合は、当然、上述の十一分の四よりもさらに低下することになる。この結果から、三つの検地帳に記された羊の保有者たちは、経済的・社会的・政治的に優越したザーヒンガズダ層とは、重なり合う部分も認められるものの、階層的には後者に比してより下方に裾野の広がりを持つ社会層であったことが推察できる。ただし、この推測は個々の羊保有者が最富裕層に属したことを完全否定するものでは毛頭なく、逆にザーヒンガズダ層が羊を保有することも、上で想定もしているように、当然にありうることであった⁽⁵³⁾。もとより社会層と飼養する家畜の種類は、決して単純に1対1対応で括られうるものではないのである。

表9 16世紀中葉の史料の中に現れるケチケメートの都市指導者一覧

姓 名	判事の経歴	検地帳との対応	羊の保有
Ágoston Albert	○	Ágoston Alberd(46, 59)	息子 Mihál : 197匹(62)
Ágoston János		Ágoston János(46-62)	315匹(62)
Ágoston Pál	○	Ágoston Pál(46-62)	250匹(62)
Gyóni Miklós		Gyóni Miklós(46, 62)	
Nagy Péter	○	Nagy Petri(46, 59)	
Pocz János			
Somody Dömötör		Somogyi Dimitri(46-62)	
Szántó János		Szántó János(46, 46-62)	
Tamás Orbán			
Vég János		Vég János(46-62)	
Végh Mihály	○	Vég Mihál(59, 62)	200匹(62)
Végh Pál		Vég Pál(59, 62)	
Veres Benedek		Veres Benedek(46)	

Hornyik, oklevéltárral, 223 old. kk. より作成。

○：経歴有り。46, 59, 62 は検地帳の年度。

確かに羊の保有者層については、その社会的地位の確定に関して相反する見解が存在す

る。前出のN・キッシュは、ヘヴェシュ、ボルショド、ビハル、サボルチ諸県の子羊十分の一税の徴収実態を検討した上で、次のような結論を導き出している⁽⁵⁴⁾。

「ティサ川中流域では、農民の1～2%を占める富農層が羊の全保有頭数の40～60%を保持していた。大平原の南部、中部および北部の3地域においても、牧羊は一般的であったが、農民の大部分は羊など全く保有しておらず、多くてもほんの数匹を保有していたに過ぎなかった。」

他方、ベレーニェシ・マールタは14世紀の状況に関してではあるが、以下のように述べている⁽⁵⁵⁾。

「要するに、数匹の羊さえも持たない農民というものは、ほとんど存在しなかったのである。家畜群にはさらにいくつかの家禽類が加わる。これらの動物は、駄用として不可欠であることに加えて、中世期の主要な食糧であった肉と乳、さらに一般民衆の衣服には欠くことのできない毛皮を供してくれたのである。」

しかし、家の周りで飼う数匹の羊の話だけを別にすれば、大規模な牧羊経営に関しては、飼養された羊はやはり特定の階層の手に集中していたようである。N・キッシュが挙げる次の数字はこの点を具体的に示している⁽⁵⁶⁾。

ヘヴェシュ県

1549年 86人(1.8%)の富農に対し11,600匹の羊(70.0%)

1576年 109人(2.0%)の富農に対し10,000匹の羊(41.5%)

1583年 143人(2.6%)の富農に対し16,000匹の羊(57.0%)

ボルショド県

1576年 70人(1.2%)の富農に対し5,200匹の羊(56.0%)

1594年 31人(0.7%)の富農に対し3,000匹の羊(41.5%)

1598年 14人(0.3%)の富農に対し1,300匹の羊(34.5%)

十五年戦争の影響と思われる比率の低下を除いて、両県共におよそ半数、あるいはそれ以上の羊が数十人の富裕な羊保有者によって保持されている。この結果は、先に見たケチケメートの羊保有の在り方にも共通するものであり、これらの事実から、16世紀のハンガリーにおいては、大規模な羊群はある限られた社会層によって保持・管理されていたと考えることができる。だが、この羊群を保有する社会層は相対的に富裕であっても、これも先に見たように、肉牛を保有する層に代表される、近世ハンガリーの市場町社会において最も富裕で多大な影響力を持った社会層に対しては、その次位に連なる社会的地位を獲得するに止まっていたのである。

羊の保有者層内の構成に関しては、ブザの示した「類型」が示唆的である⁽⁵⁷⁾。ブザは具体的な事例を示しつつ、羊の保有者が上・中・下の3層から成る社会層であるという見解

を明らかにした。彼は、下には「家畜値」が10未満で、自らの生活を支えるためだけに羊を飼養している小農たちがおり、他方で、上には同じ指標が100に迫るほどの、羊より主として肉牛を飼養し、自ら交易をも行っていた層——すなわち、ザーヒングズダ層——があったとした。そして、両者の中間に中程度の資産を保有する農民たちがおり、彼らは牧羊に従事していたとした。先の議論でわれわれは、三つの検地帳に100匹以上の羊を保有する者として記載された人々が、重なる部分は残しつつも、ザーヒングズダ層の下位に連なる社会層に属する人々であることを知った。このことから、三つの検地帳に羊保有者として記載された人々は、ブザの区分に従うならば、「上層」から「中層」上位に跨がる位置に分類されるべき集団であることが判る。また、N・キッシュによって、羊の過半を保有していたと指摘された富農層の社会的地位も、前者と同様のものと理解することが許されるであろう。

しかしながら、羊の保有者層の中核は、あくまでブザの言う「中層」にあった。ただ、16世紀には羊の保有規模に顕著な相違の見られなかった「上層」のザーヒングズダと「中層」上位の羊保有者であったが、ブザがケチケメートの近隣都市ナジケーレシュの例で明らかにしているように、17世紀に入ると、両者の社会的・経済的な地位は大きく隔たってゆくことになるのである。つまり、課税指標の「家畜値」を基礎としたブザの考察によれば、1640年代～70年代にかけて、市場町ナジケーレシュの社会編成は二極化の傾向を示し始め、富裕層が一段と富裕化・貴族化してゆく一方で、それまで中間層を構成してきた層は著しい貧困に見舞われるようになるというのである。実際、表10に示される通り、「家畜値」が10～49.5の層は1645年から79年の34年間で激減していつている一方で、0～4.5の層は全体に対する割合が34.7%から64.2%へと大幅な増大を示すに至っている⁽⁵⁸⁾。要するに、17世紀中葉、現実の意味での羊の保有者の中には、ザーヒングズダとして貴族の称号をも手にした者たちがいた一方で、それとは対照的に同じ羊保有者であっても、極度の貧困化を余儀無くされた一団が前者を遙かに上回る数で存在していたのである。

表10 「家畜値」による社会層の区分（ナジケーレシュ）

「家畜値」 による区分	納税者数（人）			
	1645年	%	1679年	%
0	59	14.1	208	35.9
1～4.5	86	20.6	164	28.3
5～9.5	73	17.4	88	15.2
10～19.5	58	13.9	53	9.2
20～49.5	94	22.5	36	6.2
50～99.5	28	6.7	15	2.6
100～	18	4.3	15	2.6
計	416	100.0	579	100.0

典拠：Buza, a “vadszám”, 24 old., 3. táblázat.

以上、羊の保有ということを手掛かりに、市場町社会の階層性について見てきた。確か

に、上のような形で羊に着目することによって、羊の保有者層を常に考察の視野に加えることができるようになり、従来の肉牛保有者のみを対象とした市場町社会論に比して、より下方に視野を拡大させることができるようになったことは事実である⁽⁵⁹⁾。しかし、肉牛や羊といった飼養家畜を持ち出して市場町社会を見ようとするには、そうした民衆間の経済的な格差を測ることとは別の意図も込められている。それは市場町社会の文化的重層性を再認識したいという意図である。すなわち、肉牛を主として保持する社会層と羊を主として保持する社会層の間では、経済力の点で相違が生み出されること以上に、むしろそれぞれの家畜を起点として広がる文化世界の中に、微妙ではあるが決定的な相違が生み出されていたように思われるのである。肉牛を中心とした文化世界と羊を中心とした文化世界とでは、純粹に交易上の、あるいは経済的な相違とは別に、人的交流の範囲、接する民族集団の別などに某かの差異が生じていたものと考えられるからである。そして、この差異は、近世ハンガリーの肉牛を中心とした文化世界と羊を中心としたそれとの対照の中では、具体的には、オスマン社会に対する係わりの度合いの濃淡として現れていたように思われるのである。言うまでもなく、この濃淡を完全に描き出すことは非常に困難であり、また一二の実証を施して事足りるという性格のものではありえない。ことに、従来の政治史・事件史的な視点や単純な生産力史観からでは、到底この微妙な濃淡を浮き彫りにすることなどできるはずもないのである。それゆえ、本稿でなしているのは、“羊”を通じて照射することのできる濃淡を、まずは記述することなのである。

4. 羊飼い

近世ヨーロッパ内においても一大産業となっていた肉牛輸出から巨額の利益を得ていた人々は、その肉牛輸出「組織」の末端で貧農上がりの牛飼いや牛追いたち (hajdúk)⁽⁶⁰⁾ を使役していた。同じように羊の保有者層も、羊群の日々の管理を羊飼い (juhászok) に委ねていた。

三つの検地帳のうち、羊飼いの存在が明示されているものは1562年の検地帳のみである。その他の検地帳には“çoban” (羊飼い) 等の明示的な記載はなく、これらについては、主に独身で、息子・兄弟ではなく、姓・名のうち名のみ記載しかない人々が羊飼いであったとして理解されている⁽⁶¹⁾。すなわち、表1に掲げられたカテゴリーで言うならば、「その他の独身者」や「家僕」の項に分類されている人々が羊飼いであった。しかしながら、万が一この推定に誤りがあって、彼らが仮に羊飼いでなかったとしても、彼らが無産者で、賃仕事で生計を立てていた人々であったことは、1546年と59年の両検地帳の分析から最低限窺い知ることができる。つまり、カールディ＝ナジ・ジュラが指摘しているように、1546年から59年にかけて、ケチケメートから64人の人間が逃亡しているが、そのうち61人は「その他の独身者」に分類されるべき人々であった。この定住性の低さは、無産者、賃仕事者、牧夫に特徴的なものであった⁽⁶²⁾。

「その他の独身者」あるいは「家僕」として括られたこの集団をケチケメートは、ブダ圏内の主要直轄都市の中でも群を抜いて多く抱えていた⁽⁶³⁾。とは言うものの、検地帳に示されたこの集団の実数は僅かに2～92人にしか過ぎず(表1参照)、この人員で1万匹を超え

る羊の世話を十全に行っていたとは考え難い⁽⁶⁴⁾。それゆえ、この記載はあくまでも羊飼頭 (számadójuhászok) など「家僕」層の上層だけを記載の対象としたものであり、ケチケメートの都市としての規模とその有する羊の頭数から逆算すれば、150～239名程度の羊飼いはケチケメート全体として最低限必要であったと試算されている⁽⁶⁵⁾。

上で羊飼いの職が賃仕事の対象であったことを既成の事実として論を進めたが、16～17世紀における羊飼いが主として家族の成員から出されていたものか、あるいは専門化した羊飼いが雇用されていたのかは、実は議論を二分する問題点でもあった⁽⁶⁶⁾。しかし、この二つの方策は16世紀も早い段階で、ある種の調和をもって互いを補いながら併存していたことが、三つの検地帳の分析から、読み取ることができるのである。ただしここでは、記載が不完全な1559年の検地帳を除いた、1546年と1562年の二つの検地帳についてのみ検討を加えてゆきたい。

先に掲げた表6～8には、羊の保有者名の一覧に加えて、羊の保有者名に併記された羊飼いと息子・兄弟の人数、もしくは明示されている場合にはその具体名も併せて掲げておいた。これによれば、1546年に羊を保有するとされた者16名のうち、羊飼いを雇用している者は9名(56.3%)、息子・兄弟という手近な労働力を有していた者は同じく9名(56.3%)存在した。同様に62年の場合には、羊の保有者総数41名に対して、羊飼いは28名(68.3%)の所で雇用されており、息子・兄弟を持つ者は34名(83.0%)に上っていた。先に「ある種の調和」を維持しているとしたのは、この表6、表8からも明らかなように、羊飼いを雇用していない世帯には息子・兄弟がいるケースが多く、その逆で息子・兄弟を欠く世帯では羊飼いを雇用しているケースが多いという事実を表現したものであった。以上の検討から、羊の保有と労働力保持との相関、および息子・兄弟と羊飼いの相補関係が有意であることは十分に明らかになったと考える⁽⁶⁷⁾。ちなみに、羊を保有していながら、羊飼いや息子・兄弟も併記されていないケースは、1546年には3世帯(18.8%)、62年には2世帯(4.9%)を認めるに止まっている。

羊飼いは個人が雇用する場合の他に、都市自体によって雇用される場合もあった。ケチケメートは1612年に、羊飼いに年給10タッレール、2フェルターイの小麦、薪1荷車分と服一揃えを与えている。また同じ時期、子羊飼い(sztrenghajtók)には6フォリントの年給と服一揃えの支給を約束している⁽⁶⁸⁾。都市が羊の種別・年齢の別に合わせて、羊飼いや子羊飼いや子羊飼いの数人を雇用していたことは一般によく知られた事実である⁽⁶⁹⁾。

中・近世期の羊飼いにに関して最大の論議は、その民族的出自に関する問題である。文化・文明論にまで波及したこの問題に関して、20世紀初頭のハンガリーの歴史家タカーチ・シャーンドルは次のように述べている。

「放浪していたヴラフ(vlachok)や、これに続いて定住したセルビア人(ráczok)、ルーマニア人(oláhok)などは、全てがトルコから逃れ、南からわれわれの国土に進入してきたのであった。彼らのほとんど全ては(以前は―戸谷)土地に縛り付けられた貧民だったが、彼らを牧夫以外に使役することはほとんど不可能であった。彼らもこの点に関しては同様に理解しており、別様に解する者はいなかった。」⁽⁷⁰⁾

「要するに、これら(牧畜・家畜関連の用語―戸谷)から次のことが疑いなく明ら

かとなる。すなわち、肉牛と馬の飼養の領域に係わる単語は、その大部分がハンガリー語である。これに対して、牧羊に関する単語の多くの部分は他言語起源のものである。つまり、放浪牧畜民が有した影響とはむしろ、ハンガリーの牧羊に対するものだけであった。これは当然のことでもある。なぜなら、ヴラフをはじめ放浪する牧夫たちは、その全てが牧羊に従事していたからである。ハンガリー人はそれとは対照的に、肉牛や馬の飼育に最も好んで従事していた。⁽⁷¹⁾

要するにタカーチは、ヴラフとルーマニア人とセルビア人のハンガリー領への浸透を問題とし、牧畜における民族的な役割分担の存在を主張したのである。

タカーチが問題としたことのうち、ヴラフとルーマニア人の関係は微妙である。ヴラフは一般的には、ロマンス語系の言語を元来は話していた牧畜民であると解され、その故地はバルカン南部にあったとされる。しかしながら、その民族的なアイデンティティは次第に拡散し、やがてヴラフとはガリツィアからマケドニアに至る地域に遍在する牧羊民を指す一般的な呼称となっていった⁽⁷²⁾。このヴラフを「社会的な概念」と考える志向はハンガリーなどを中心に主流となったが、ルーマニアなどではこれとは別に、ヴラフはルーマニア人の古称であるとの立場を取り、その来歴に関してもバルカン南部からの移住を主張する他説を否定してきた。つまり、ルーマニアではヴラフを、ルーマニア人と強く結び付く「エスニックな概念」、ないしは「民族的な概念」と捉えてきたのである⁽⁷³⁾。

しかしこれら二つの説とも、争点となるべきは古代から中世期にかけてのヴラフの動静に関してであり、近世ハンガリーにおいては、ヴラフもルーマニア人も、牧羊への親和性を共通点としてむしろ両者を同義的に理解することの方が一般的にさえなっていた。タカーチによれば、“vlach”という語は、すでに16世紀には“oláh”と訳されるようになっており、例えばヴラフ税 (*census Valachorum*) という税目も伝統的にルーマニア人税 (*oláh-adó*) と訳されることを常としていたという⁽⁷⁴⁾。しかし、忘れてならないのは、近世期のハンガリー人がヴラフとルーマニア人を同義的に解したのは、あくまでも両者の牧羊への親和性に着目したためであり、その証拠に、ハンガリーへ移住してきた南スラヴ人の一部も後述のように全く同様の理由から、ヴラフ (*iflak*) と称されたのであった⁽⁷⁵⁾。要するに、近世ハンガリーにおいてヴラフは「社会的な概念」として理解されていたのである。この意味で、タカーチがヴラフ税に関して、そこで使われている“vlach”の語は、この税目がルーマニア人の居住しない上部ハンガリー（現在のスロヴァキアを中心とする地方）やハンガリー西半部についても見出されることから、それが必ずしも“oláh”（ルーマニア人）を意味するものではなく、むしろ“pásztor”（牧夫）を意味するものであると主張したのは正しいと言える⁽⁷⁶⁾。タカーチもヴラフを「社会的な概念」として理解していたのである。

ただ、混同してならないのは、彼の論証は、ヴラフと称された人々は常にルーマニア人と解釈されるべきという主張は退けているものの、ルーマニア人が牧夫であることや彼らとその活動の場をハンガリーに見出していたことを否定するものでは全くないということである。逆に、ルーマニア人のハンガリー領内への浸透は、タカーチ自身も認めているところであり、彼らの牧羊とチーズ作りに関する知識はハンガリーの領主や富農の歓迎する

ところでもあったと述べている⁽⁷⁷⁾。ケチケメートでも、1595年に、142頭の大型肉牛に2人の牛飼いが付き添っており、その「1人は Szemes István でルーマニア人 (oláh)、もう1人は Csocsánci György でルーマニア人」⁽⁷⁸⁾との記録が残されている。16世紀のケチケメートにおいても、ルーマニア人 (= ヴラフ) の進出は否定できないのである。

ハンガリー領への浸透という点では、ルーマニア人の西進以上にセルビア人 (南スラヴ人) の北進の動きの方が着実で、顕著であった。ドナウ=ティサ間地域の南部やテメシュ地方には、15世紀以来、オスマン支配を逃れたセルビア人が移り住むようになっていた⁽⁷⁹⁾。より正確にはドナウ=ティサ間地域ではセグド、バヤ、セクサールドを結ぶ線の南にセルビア人の入植が集中していた⁽⁸⁰⁾。地域的にはこの他にも、ドゥナーントゥール (ドナウ川以西の地域) やマロシュ川以北の地域に対してもセルビア人の入植は行われた。ドゥナーントゥールに入ったセルビア人たちは、その牧畜を主体とした生活様式からヴラフと称された⁽⁸¹⁾。また、マロシュ川以北の地域へのセルビア人の入植状況については、ジュラ県の検地帳を瞥見するならば、すぐさまスラヴ系の姓の多さにブダ県とは全く異なる印象を受けることであろう⁽⁸²⁾。ケチケメートに関しては、17世紀末の記録となるが、1697年の市政記録には、「セルビア人やルーマニア人はレンガ積みの家屋 (felállított ház) を購入したり、建築したりしてはならない。ハンガリー人も彼らに家屋を売却してはならない。彼らは土壁の家屋 (földház) に居住すべきであり、土壁の家屋でさえも今以上に建築されるべきではない。」⁽⁸³⁾と記載されている。

次に、タカーチが問題とした第二の点、牧畜における民族的な役割分担の主張について考えてみたい。上述の議論からわれわれは、近世期のハンガリーにおいてヴラフが「社会的な概念」として理解されていたことを知った。言い換えれば、当時のハンガリー人にとって、南の方から現れて牧羊に従事する他民族は、ヴラフという象徴的な呼称のもとに一纏めにしうる人的集団であったことが想起される。そしてこの見方は、一見すると、タカーチが牧畜に関して引き出した結論とも重なる思考の枠組みであるかのようにも感ぜられる。とするならば、タカーチの見解は支持されるべきものなのであろうか。

結論から先に述べるならば、タカーチの考え方は、幾つかの具体的な事象によって反駁されつつある。例えばサボー・カールマンは、16世紀については史料不足で判定不能としたものの、17～18世紀のケチケメートに関しては当時の羊飼いの姓と異名の分析から、ハンガリー系以外と思われる羊飼いの割合は全体の25～30%に過ぎなかったと結論した。この数字はそれでも、牛飼 (gulyások) や馬飼 (csikosok) に比べると他民族的要素が高くなってはいるものの、18世紀にはスロヴァキア人 (tótok) が大量に大平原一帯に下ってきており、その多くが羊飼いの職に就いていたことを考え併せるならば、やはり低率であると言わざるを得ないであろう⁽⁸⁴⁾。

またサカーイ・フェレンツの報告によれば、1579年のジュラ県アラド郷 (nahiye) には、39のセルビア人居住地があったという。その内訳は、24ヵ所がセルビア人のみの居住地、12ヵ所がセルビア人とハンガリー人の居住地、2ヵ所がセルビア人、ハンガリー人、ルーマニア人の居住地、残りの1ヵ所がセルビア人とルーマニア人の混住地であった。そして彼は、これらの各種混住地とセルビア人、ないしハンガリー人の純粹居住地の間には、「農業経営において、構造においても、収穫量についても際立った差異は認められな」⁽⁸⁵⁾ かった

としている。つまり、セルビア人、ルーマニア人が羊の飼養のみに従事していたわけでも、ハンガリー人が肉牛の飼養、穀物生産のみに傾斜していたわけでもなかったということである。

これらの例に見られるごとく、牧畜や農業経営において各民族は“融合”化していたのであって、民族を単位とするような極端な分業は、たとえ近世期であってもやはり成立することはなかったと考えられる。ましてや、タカーチの言説に見られる、ハンガリー人だけを牧羊文化から切り離すかのような主張は、中世ハンガリーの牧畜の状況を伝えるベレーニェシの言を待つまでもなく、到底受け入れることのできないものである。近世期のハンガリー人は確かに、旧王国南部や南東部の牧羊に従事する他民族をヴラフとして一纏めにして認識することをしてきたが、そのことは自らと牧羊文化の間に一線を画そうとする行為に繋がるものでは断じてなかったのである。ハンガリーの南には広大な牧羊文化が厳として横たわっており、ハンガリーは決してその文化圏の外に立っていたわけではなく、中心ではないにせよ、その枠内に常に存していたのである。

5. 毛皮加工師の同職組合

形のない羊の所有者層や羊飼いの集団と違って、羊に纏わる諸集団の中で最もしっかりとした形を持っていたのが毛皮加工師 (szűcsok) の同職組合 (céh) であった。ケチケメートを凌駕する規模を持つセゲドやデブレツェンでは、早くも14～15世紀に、1～2の同職組合が機能していたが⁽⁸⁶⁾、知られている限りでは、ケチケメート初の同職組合は、1557年に設立された金細工師の同職組合 (ötvösök céhe) であった。毛皮加工師の同職組合は、これに続く2番目の同職組合で、その設立は金細工師のそれに遅れること2年の1559年であった。金細工師の同職組合の規約が、デブレツェンの同職組合のそれを転写し、ケチケメートの指導層に認証を求めたものに過ぎないのに対し、毛皮加工師の同職組合の特許状 (céhlevél) は、ケチケメートの筆頭判事 (főbíró) から直接、同職組合に授けられたものであった⁽⁸⁷⁾。

ケチケメートの毛皮加工師組合の規約は、金細工師の同職組合のそれに比べると遙かに厳格なものであった⁽⁸⁸⁾。具体的な規定については、西欧における同職組合の規約一般に共通する部分も多く、同職組合長の選出法に始まり、毛皮の優先先買権、入会の儀礼、都市内営業の独占権の問題、葬儀への出席義務などについて子細に規定されていた⁽⁸⁹⁾。ただ、規約に規定された優先先買権や都市内営業の独占権といった諸特権は、組合に属さない人々との間に不満や軋轢の種を蒔く危険性を多分に孕んでいた。果たして、16世紀後半のケチケメートで発生した毛皮加工師と仕立屋 (szabók) の論争は、まさにそうした軋轢の表出にほかならなかった⁽⁹⁰⁾。

問題の核心は、仕立屋が毛皮加工師の職域を侵犯したことにあった。「ほふられた子羊の毛皮をその所有者たちがわれわれ (毛皮加工師——戸谷) にではなく、別の余所者たちに売却し」⁽⁹¹⁾てしまい、かつ「一部では当地の仕立屋の中の幾人かが毛皮加工師と仕立屋の仕事とを並行して行っていた」⁽⁹²⁾ことが争いの発端であった。これに対して、ブダのイスラム学院の教師スィナーンは、古の慣例を踏襲することは肝要ではあるが、「見切りをつけた仕事

(仕立業——戸谷)で稼ぎが上がらないのであれば、家族の自活から(仕立屋たちの——戸谷)目を背けさせる法は存在しない⁽⁹³⁾と、暗に仕立屋たちの職域侵犯を容認する裁定を行った。

この見解に承服できない毛皮加工師たちは、折に触れてこの問題をオスマン当局に上申していたようである。第一の史料から11年を経た1580年の文書では、「先の毛皮加工師たちの慣例は今後も、これまでどおりのやり方に従って有効であり続ける⁽⁹⁴⁾とされ、毛皮加工師たちの毛皮の優先先買権と都市内営業の独占権の有効性が確認された形になっている。

だが、1580年代にはまだ、先のスィナーンが、「もし仕立屋たちが毛皮加工師たちの仕事に習熟しているならば、彼らが自らの仕事を放棄することを法は禁じていない⁽⁹⁵⁾」との意見を表明したりもしている。

しかし、1590年になってそのスィナーンも、毛皮加工師たちの現状に鑑み、「古の慣例に従って、ある者が別の者の仕事に介入することは許されない⁽⁹⁶⁾と認めるに至り、この論争にもようやく最終的な決着がつけられたようである。

古の慣例を墨守し、仕立屋の職域侵犯に対し掣肘を加えた形の毛皮加工師ではあったが、職人の絶対数という点においては、仕立屋に大きく遅れをとっていた。ケチケメートでは、後述するように、三つの検地帳に記載された毛皮加工師の人数は1人、6人、4人のごく少数に過ぎなかったのに対し、仕立屋のそれは14人、23人、22人と、遙かに民衆に身近な職業となっていた⁽⁹⁷⁾。しかもこの傾向はケチケメートだけの傾向であるに止まらず、以下の表(表11)が示す通り、ハンガリーの他の諸地域においても看取される一般的な傾向であった⁽⁹⁸⁾。毛皮加工師はどこでも、仕立屋の半数にも満たない人数しか活動していなかったのである。

いずれにせよ、16世紀のケチケメートに毛皮加工師の同職組合が存したことは、当時在地で毛皮の販路を有していたことの明確な証左であり、長きに亙る毛皮加工師と仕立屋の論争は、当時の毛皮加工業に少なくとも人の関心を長く引いておくほどの重要性が存在したことを暗に物語るものと言うことができる。ただ、こうした在地に根差した経済システムや毛皮加工業の伝統が、近代に至るまで保存され、それが開花することは、ケチケメートでは見られなかった。同職組合全体の議論は一先ずここで措くとして、次にこの同職組合に実際に属していた毛皮加工師個人の問題に議論の重心を移してゆきたい。

近世ハンガリーにあって個人の職業を知るための最も有効な手掛かりは、その個人の姓を知ることであった⁽⁹⁹⁾。本節で問題としている毛皮加工師に関してもこの原則は概ね妥当し、1569年から90年にかけて毛皮加工師に宛てられた3通の保護状(védlevél)に記載された22名の個人のうち、“Szűcs”(毛皮加工師)をその姓としない者は僅かに1名Békés Bertalanのみであった⁽¹⁰⁰⁾。同じケチケメートの金細工師の場合にも、1557年の文書の上に現れる金細工師3名の姓は全て“Ötvös”(金細工師)であった⁽¹⁰¹⁾。他の都市を見ても、1559/60年のセーケシュフェヘルヴァールのハンガリー人小商人は、16名中11名が“Qalmár”(小商人)を名乗り、同じく屠殺業者(肉屋)は、7名中4名が“Mísārōš”(屠殺業者)をその姓としていた⁽¹⁰²⁾。職業と姓との高い確率での一致は、これらの例からもある程度実証されえたものとして考えたい。

近世期には職業と姓が高い確率で一致していたことを前提として、次に、三つの検地帳

表 11 仕立屋、毛皮加工師、金細工師の都市内人口と手工業者全体に対して占める割合

<u>ラーツケヴェ</u>	1546年	1559年	1562年
仕立屋：	53(35.8)	59(37.1)	51(25.8)
毛皮加工師：	7(5.0)	14(8.8)	24(12.1)
金細工師：	5(3.4)	6(3.8)	10(5.0)
全手工業者：	148人中	159人中	198人中
<u>セゲド</u>	1546年	1554年	1578年
仕立屋：	44(23.0)	32(25.4)	19(17.6)
毛皮加工師：	18(9.4)	13(10.3)	7(6.5)
金細工師：	7(3.7)	4(3.2)	4(3.7)
全手工業者：	191人中	126人中	108人中
<u>ペーケーシュ</u>	1567年	1579年	
仕立屋：	23(19.0)	27(23.5)	
毛皮加工師：	12(9.9)	12(10.4)	
金細工師：	4(3.3)	6(5.2)	
全手工業者：	121人中	115人中	
<u>ジェンジェシュ</u>	1546年		
仕立屋：	35(21.6)		
毛皮加工師：	4(2.5)		
金細工師：	6(3.7)		
全手工業者：	162人中		
<u>トルナ</u>	1553年	1576年	
仕立屋：	64(29.9)	72(43.6)	
毛皮加工師：	34(15.9)	21(12.7)	
金細工師：	4(1.9)	3(1.8)	
全手工業者：	214人中	165人中	

典拠：Szakály, Magyar kézművesség, 17-28 old.

に実際に記されたスーチ姓の人数（＝毛皮加工師の人数）に関して具体的な検討を施してみたい。それによれば、1546年に1名、59年に6名、そして62年に4名のスーチ姓の人間が検地帳には記載されている。興味深いのは、1546年に唯一記載された Szűcs Jakab は、59年の検地帳では、その徒弟 Benedek と共に “meghalt”（死亡）と記録されている点である⁽¹⁰³⁾。毛皮加工師に限らず、1559年のケチケメートで職業名を姓とする人間の三分の二は、1546年から59年の間に外部からケチケメートへ移住してきた人々であった⁽¹⁰⁴⁾。この事実から、59年の検地帳に記載されている6名の毛皮加工師も、全員が他の地域からケチケメートへ移住してきた人々であることが推断できる。メーサーロシュによれば、恐らく彼らは戦火を避けて、ドナウ＝ティサ間地域か、テメシュ地方、あるいはマロシュ地方からケチケメートへ移り住んできた人々であろうとのことであった⁽¹⁰⁵⁾。

人の移動に伴う手工業の移植という点に関しては、16世紀のケチケメートにおいて同職組合組織を形成していた3職種——金細工業、毛皮加工業、仕立業——の、15世紀前半に遡ってのバルカンとの深い繋がりを指摘する声もある⁽¹⁰⁶⁾。言うまでもなく、毛皮加工業と仕立業は羊と係わりの深い手工業であり、すでに述べたセゲド移民の牧羊における重要性

や、羊飼いの民族的な出自の問題によっても示されたが、ケチケメートにとって羊という存在は、やはり南に開かれた窓と呼ぶに相応しい存在なのであった。

1559年、ケチケメートの毛皮加工師たちは筆頭判事から同職組合の特許状を得ると、直ちにそれを携えて、ブダにいるツイグン・パシヤのもとに赴いている⁽¹⁰⁷⁾。オスマン政府に対し、案内人や伝令の奉仕を行っていたセゲドの屠殺業者たちほどではないにせよ⁽¹⁰⁸⁾、オスマン政府と緊密な関係を構築しておくことが不可避であったという点では、ケチケメートの毛皮加工師の場合もセゲドの屠殺業者と何ら変わるところはなかった。形のある組織であればあるほど、支配の網に搦め捕られる確率は否応なしに高まらざるを得なかったのである⁽¹⁰⁹⁾。

6. 羊肉の行方

オスマン帝国の場合、肥大化するイスタンブルへの食糧供給は、アナトリアとバルカン地域がその任を担っていた。特に16世紀以降は、「ドナウ川流域のルーマニア平原における農業生産額の増大が、イスタンブルの隆盛、人口増大、商工業の発展を支えた大きな経済的基盤」⁽¹¹⁰⁾となった。このためワラキア、モルドヴァ両侯国の農産物の輸出はオスマン政府によって独占され、小麦と羊——後には火薬と木材も——の他国への輸出は原則的に禁止された⁽¹¹¹⁾。

他方で、経済地理的な理由からか、オスマン支配下のハンガリーはルーマニア地域ほど緊密にイスタンブルと結び付けられることはなかった。ハンガリー商人はオスマン支配下地域とハプスブルク・ハンガリー、ないしはトランシルヴァニアとの交易においては活躍もしていたが⁽¹¹²⁾、彼らがイスタンブルに対して緊密な商業ネットワークを構築することは最後までなされえなかった⁽¹¹³⁾。

バルカン地域からの首都への食糧供給のうち、羊に関しては、ブルガリア地域の羊がジェレプケシャン (celepkeşan) 制と呼ばれた制度によって定期的に首都に運ばれることになっていた⁽¹¹⁴⁾。このジェレプケシャン制と呼ばれた制度は、毎年遠征に際して、ベオグラードに兵糧としての羊を集めたり、そこに向かう軍隊に必要な羊を供給したりする役目も負っていた。これに加えバルカンでは、戦時の臨時税 (sürsat) としての羊の徴発も行われ、即応性の上でジェレプケシャン制を補完していた⁽¹¹⁵⁾。これらの手段を通じて一旦ベオグラードに集められた羊群は、そこから軍隊に帯同する形でハンガリー領内へ送られたり、水路でブダに送られたりした⁽¹¹⁶⁾。

しかし、ハンガリー領内で相当の数の羊が飼養されていたことは、これまでの議論が明らかにしてきたところでもあった。オスマン遠征軍は、ハンガリーの羊に依ることはなかったののだろうか。そして、もしオスマン遠征軍がベオグラードに集められた羊のみを消費して、ハンガリー国内を転戦していたとするならば、16世紀当時、ハンガリーで数多く飼養されていた羊は一体どのような形で最終的に消費されたののだろうか。以下、家畜としての羊の終着点、食糧・食肉としての羊の在り方について若干の考察を加えてみたい。

まず第一に想起されるのは、ハンガリーで飼養されていた羊の多くが、肉牛同様、輸出されていたのではないかという可能性である。確かに、1549年から51年のウィーンの市場

に関する史料には、49年に10,411匹、50年に15,019匹、そして51年には17,775匹の羊が市場にもたらされたことが記されている⁽¹¹⁷⁾。しかし、1560年7月には、スルタンがブダのベイレルベイ（軍政官）に対して、羊のウィーン向け輸出を禁止するよう指示を与えている⁽¹¹⁸⁾。ただ、この指示はハンガリー領内の軍隊、ムスリムに十分な羊肉が確保される以前の段階での過度の輸出傾向を牽制したものに過ぎず、1560年の9月、10月の時点ですでに、ヴァーツにおいてドナウを渡河した羊の数は、それぞれ7,101匹と950匹に上っている⁽¹¹⁹⁾。それでもこの指示の影響で、1560～62年のヴァーツを経由して輸出された羊の頭数は年間で23,000匹以下に落ち込んだとされるが、早くも1563年には、僅か7ヵ月で24,992匹——年に換算すると40,000匹——の羊が輸出されるまでに回復している⁽¹²⁰⁾。また、1560年、1563/64年ともに、輸出品目の中には羊皮や羊の毛皮が含まれている⁽¹²¹⁾。

しかしながら、大平原の深部やトランシルヴァニアからの移送が周知の肉牛と違って⁽¹²²⁾、羊の体躯や習性を考えると、ウィーンやヴァーツにおいて記録された羊の過半が、旧ハンガリー王国領の隅々から集められ、輸出を目的に遠路遙々運ばれてきたとはやはり考え難い。むしろこれらの羊の大半は、ウィーンやヴァーツに比較的近い地域で飼養されていた羊の一部であると考えるのが適当なのではなかろうか⁽¹²³⁾。近世ハンガリーにおいて、大部分の羊は飼養・管理された都市や村を出ずしてその地で消費されるか、あるいは移送されても、せいぜい近隣の諸地域内において消費されていたものと考えられるのである⁽¹²⁴⁾。

在地で羊が消費される経路の中には、幾つかの大規模消費の可能性も考えられる。一つには、先に触れたバルカン地域と同様の、戦時における臨時徴発・臨時購入の存在が挙げられる。オスマン遠征軍は、特にハンガリーにおいては、後者の臨時購入（iştirā）に頼って戦闘を継続していたともされ⁽¹²⁵⁾、そのことは、例えばケチケメートに対しても、1596年に、セゲドからエゲルに向かう途上のメフメト3世（Mehmet III、1595—1603年）が、兵糧として肉牛100頭と羊600匹、それにパン14箱を売却するように要求しているような例からも確認することができる⁽¹²⁶⁾。オスマン軍による戦時の臨時購入については、十五年戦争期のハンガリーにおいて、羊以上に肉牛がより多く購入されていたとの指摘もなされてはいるが⁽¹²⁷⁾、必要相当数の羊はすでにベオグラードから送られていたのであり、相対的に肉牛の購入量が増大することは当然の結果であるとも言えるであろう。

戦時の徴発や購入は基本的に単発的なものでしかなかったが、冬営する軍隊やハンガリー領内の城塞に駐屯する軍隊に対しての食糧供給は、その継続性から言っても、規模から言っても、ハンガリー領内における羊の消費量の動向に少なからぬ影響を与える要因であった⁽¹²⁸⁾。オスマン軍が本格的な駐屯を開始した1541年以降、オスマン支配下のハンガリーには推定で1万人から2万2千人の兵士が駐屯していたと言われている⁽¹²⁹⁾。彼らは主に、ハプスブルク・ハンガリーやトランシルヴァニアとの国境に沿って築かれた国境城塞に駐屯していた。

兵士1人の1日当たりの肉の配給量については、それを200g以下とした18世紀前半のマルスィーリの報告は別格として、キャロライン・フィンケルは、17世紀のモンテクコリ軍内の肉の配給量を560gと推断し、この量は16～17世紀のハプスブルク軍内や18世紀初頭のラーコーツィ軍内においても妥当するものであるとした⁽¹³⁰⁾。しかし、肉の配給量

については、このフィンケルの算定を大きく下回る配給量を主張する研究者も多い。興味深いのは、彼らによって主張される配給量は決まって0.2 オッカ (okka 約 256 g) 前後であることである⁽¹³¹⁾。この一致は恐らくは、ステファン・アンドレエフが活字にして紹介したテメシュヴァール (ルーマニア名: ティミショアラ) 関連の史料群に、彼らの多くが論拠の一端を見出しているためと思われる⁽¹³²⁾。この史料群には、テメシュヴァール城塞の駐留軍への食肉の供給を指示した文書などが含まれ、そこには対象人数と対象期間、購入する食肉の量、さらには支出費用が明記されている。そして、これらの数字から兵士1人の1日当たりの肉類の配給量を計算したものが、表12に示された結果である。ちなみに、求める値は、対象期間(日数)をA、対象人数(人)をB、食肉の購入量(オッカ)をCとした場合、 $C/A \cdot B$ という数式によって得ることができる。表12から読み取りうるように、購入量や期間は史料ごとにまちまちであるにもかかわらず、兵士1人の1日当たりの肉類の配給量は、どの史料の数字も不思議と0.2オッカで一致するのである。

表12 17世紀後半～18世紀初めのテメシュヴァール城塞への食肉の供給

史料番号	対象期間 (A)	対象人数 (B) 人	食肉の購入量 (C) okka	支出費用 akce	兵士1人・1日 当たりの配給量 (C/A・B)
13	1685年11月30日 より1か月	818	6,180	—	0.25
25	1692年8月14日～ 同年9月11日	125	725	10,875	0.20
33	1695年2月15日～ 同年8月10日	1,795	63,543	635,430	0.19
35	1696年2月5日～ 同年8月30日	2,051	72,570	3,902 guruş	0.20
40	1698年7月10日～ 1699年1月2日	1,352	47,790	477,900	0.20
72	1716年9月16日の 史料, 6日間.	700	840	—	0.20

Andreev, i.m., 200, 202, 204-205, 211 old. より作成。

以上の算定からの単純計算ではあるが、ハンガリー領内に駐屯する兵士の数を2万人、兵士1人が1日に消費する肉の量を仮に256gとすれば、16～17世紀のオスマン支配下のハンガリーでは日毎に5,120kgの食肉が消費されていたことになる。5,120kgの食肉と言えば、肉牛にして17～18頭⁽¹³³⁾、羊に換算すれば341～512匹ほどの数になる⁽¹³⁴⁾。オスマン帝国側の軍事関連施設の中だけで、毎日これに相当するだけの家畜が消費されていた計算になる。こうした状況は決して数字の上だけから導かれるものではなく、ほぼ毎日のごとく購入されていた潤沢な食肉の記録は、残念ながらオスマン側の史料ではないが、例えばシゲトヴァール城塞の出納簿の中にも見出すことができるのである⁽¹³⁵⁾。

ハンガリー国内で、城塞を凌ぐ、羊肉の最大の消費の場は都市であった。食肉の消費に

関しては、ヨーロッパ全体において減少傾向が認められた近世・近代期であったが⁽¹³⁶⁾、その時代にあっても、ハンガリー諸都市の食肉消費量の高さは他を圧していた。1600年頃の数字で、南ドイツ諸都市での個人の年間食肉消費量が47kg、南フランスの都市カルパントラ(Carpentras)でのそれが27kgの時に、ハンガリーの諸都市では1人当たり年間63～69kgの食肉が消費されていたと言われている⁽¹³⁷⁾。国内に豊富な家畜群を有していたハンガリーにとってこれは、ある意味で当然とも言える結果であった。

主要な都市・市場町には、屠殺業者(肉屋)が必ずいた。彼らは肉牛の取引を仲介する役割をも担ってはいたが、都市内への食肉の供給も彼らの重要な仕事の一つだった⁽¹³⁸⁾。セグドでは21もの屠殺業者が営業していたことが知られており⁽¹³⁹⁾、ブダやヴァーツなどではハンガリー人の屠殺業者とトルコ(オスマン)人の屠殺業者(kasab)がそれぞれの嗜好に合う肉を——前者は牛肉と豚肉を中心に、後者は羊肉を——それぞれが商っていた⁽¹⁴⁰⁾。第2節でも触れたが、家畜を屠殺する際には法令集に定められた屠殺場税が支払われねばならず、肉牛1頭につき2アクチェが、羊は4匹ごとに1アクチェが規定に従って徴収された⁽¹⁴¹⁾。この税目の支払い額から、1560年のヴァーツでは週に8～10頭の肉牛が屠殺されていたことが判っている⁽¹⁴²⁾。また、オスマン支配下になかった西部のショプロンでは、当時の出納簿の記録から、1570年には、平均で週に16～20頭の肉牛が屠殺場に送られていたことが知られている⁽¹⁴³⁾。

ショプロンの例からは、肉牛以外の家畜の屠殺数を知ることもしできる。1570年の3月から翌年の2月までの11ヵ月間でショプロン市は、842頭の肉牛を購入し、その内837頭を市内で屠殺している。同じく子牛は405頭を購入し403頭を、羊は1,236匹を購入し1,184匹ほどを、子羊は546匹から541匹を、豚は260匹から95匹を屠殺している⁽¹⁴⁴⁾。羊はムスリムの住む都市では、内臓や頭や脚までもが食用に供され、通常肉を買うことのできなかった貧民層がこれらを好んで購入していた⁽¹⁴⁵⁾。

ケチケメートの外域や周囲のプスタで飼養されていた1万を超える羊たちの末路のほとんども、上に掲げた経路のいずれかを辿ったことと思われる。しかし、ケチケメートの羊がオスマン軍の胃袋を支え、ムスリムも多く住んだ都市の生活を支えていたことを知るにつけ、「この時期(17世紀前半——戸谷)、ジェールやウィーンの屠殺業者や家畜商人にここ(ケチケメート——戸谷)から肉牛を供給し、また皇帝軍への食糧供給に対しても数千単位で肉牛を運び込む“ケチケメート商人”は大いにその名を馳せたのであった」⁽¹⁴⁶⁾という事実は、少なくとも異なった視点から分析され、全体像の再構築を念頭に批判的に解されねばならないとの確信を強くするのである。ケチケメートを含み込んだネットワークは、政治的、経済的、軍事的、そして文化的なものさえも、決して西方にのみその中心が存在していたわけではないのである。

おわりに

以上、本稿では、羊を「ハンガリー社会とオスマン社会の接点・公約数」、あるいは「南に開かれた窓」と譬え、ハンガリーやバルカン地域における羊の視点としての重要性について論じてきた。しかし、もとより西欧史の文脈においても、羊の重要性は決して看過さ

れてきたわけではなく、特に中世盛期以降の羊毛の果たした役割についてはここで再論する必要もないであろう⁽¹⁴⁷⁾。

近世・近代期、西欧における毛織物産業の振興に伴って、羊毛に対する需要の圧力はバルカン地域からハンガリー、さらにはロシアにまで押し寄せてくるようになった。16世紀後半から17世紀にかけて、ヴェネチアやイギリス、フランスの商人が羊毛を求めてバルカン地域に入り、地元のテッサロニキ商人を措いて大量の羊毛・毛皮を購入するようになる⁽¹⁴⁸⁾、バルカンでは耕地を放牧地に転換する農民が数多く見られるようになった⁽¹⁴⁹⁾。18世紀後半になるとさらに、西欧のみならずオーストリアやドイツ、チェコにおいても毛織物産業が発展したことから、ハンガリーやロシアにも羊毛需要の圧力が及ぶようになる。後二者の地域では、それまで牧羊に対してどちらかと言えば関心の低かった大地主の農場でも、牧羊が活気を帯びるようになっていった⁽¹⁵⁰⁾。

ハンガリーでは、こうした国外の羊毛需要の高まりに呼応するように、新種の羊がハブスブルク家の仲介でスペインから導入された⁽¹⁵¹⁾。細く、縮れが多く、純白の毛を持つメリノ種の導入である。新種の羊を導入すること自体は、一見何気ない出来事のようにも映るが、これはハンガリーにとって“文化的な大転換”と言えるほどに重大な意義を含んだ出来事でもあった。なぜなら、バルカンに限らずハンガリーにおいても、羊という家畜は元来、その乳、肉、毛皮・皮革の全てを、どれに偏ることなく有効に活用すべき動物であった⁽¹⁵²⁾。しかるに、メリノ種という羊毛の利用にのみ特化した羊の出現は、そうした従来のハンガリーの羊に対する認識を大きく揺さぶるものであったからである。しかも、メリノ種の導入はハンガリーに文化的な衝撃を与えたに止まらず、それを飼養することは、産業化に邁進しようとしていた西欧の経済システムに、より緊密な形で組み込まれることをも意味していた。近世と近代を分かち境をあえて探そうとするのであれば、大平原で草を食んでいたこの小さな動物の上にも、それを見出すことは可能なのである。

西欧近世史においては専ら羊毛にのみ関心が寄せられる羊も、ハンガリーからバルカン、アナトリアを覆う地域の歴史の中では、その肉や毛皮・皮革、乳などに対しても、羊毛と同程度の関心は払われなければならないのである。羊は羊毛のみから成る動物ではありえず、また、毛や皮や肉だけを個別に取り出すことなど、個体としての羊にとっては到底適うはずもないことであった。筆者が本稿において示したかったのは、この羊に象徴されるような、16世紀ハンガリーにおけるケチケメートの姿であった。

— 注 —

- 1 *Glatz Ferenc* (szerk.): *Magyarok Európában I-IV* [ヨーロッパの中のハンガリー人 第1 - 4巻], Bp., 1990-.
- 2 *Immanuel Wallerstein*: *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, New York, 1974 (I. ウォーラーステイン、川北稔訳『近代世界システム I-II —— 農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』岩波書店、1981年); *Idem*: *The Modern World-System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World-Economy, 1600-*

- 1750, New York, 1980 (I. ウォーラーステイン、川北稔訳『近代世界システム 1600—1750 — 重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』名古屋大学出版会、1993年)。
- 3 *Ferenc Szakály*: Die Bilanz der Türkenherrschaft in Ungarn, Acta Historica 1988. No. 1, S.76-77 (以下 Die Bilanz). 同雑誌に掲載されているホフェル、コシャーリの論文も同主旨の主張を繰り返している (*Tamás Hofer*: Der Einfluß der Türkenherrschaft auf die ungarische Kultur, S.89-101; *Domokos Kosáry*: Schlußwort [sic]: Ungarn zur Wende des 17. Jahrhunderts — die Wende von Alten zum Neuen, S. 103-116)。
- 4 本稿では、民族に拘泥せず広くオスマン支配下の地域に居住するムスリムを「オスマン人」と呼ぶ慣例に倣い、オスマン帝国の支配下にあったバルカン、アナトリアの両地域を一括して「オスマン社会」と便宜的に呼ぶこととする。
- 5 例えば *Takáts Sándor*: Rajzok a török világból. II. köt. [トルコ世界のスケッチ。第2巻], 1915, 279 old.。
- 6 例えば *Buza János*: Törökkori állattartásunk a “vadszám” és az adózás tükrében [「ヴァドサーム」および徴税に見るオスマン時代のハンガリーの家畜飼養], Századok 1984. 1 sz., 5-7 old. (以下 a “vadszám”)。
- 7 詳しくは後述するが、羊飼いがハンガリー人であるか、ルーマニア人、南スラヴ人であるかは、羊飼いの雇用形態に直結する問題と考えられていた。また、観点は様々であれ、ハンガリーで文化・文明の境界線を引くことは、言わば「常套手段」であった。
- 8 以下の諸研究も、ケチケメートの都市史の成果の一端である。
Hornyik János: Kecskemét város története, oklevéltárral, II. köt. [ケチケメート市史、史料付帯、第2巻], Kecskemét, 1861 (以下 oklevéltárral); *Idem*: Kecskemét gazdasági fejlődésének története [ケチケメートの経済発展の歴史], Kecskemét, 1927 (以下 gazdasági fejlődésének); *Szabó Kálmán*: A kecskeméti pásztorok nemzetisége a XVI-XIX. században [16—19世紀におけるケチケメートの牧夫たちの民族的出自], Cumania II. Ethnographia, Kecskemét, 1974; *Mészáros László*: Kecskemét gazdasági élete és népe a XVI. század közepén [16世紀中葉のケチケメートの経済生活と民衆], In: *Iványosi-Szabó Tibor* (szerk.): Bács-Kiskun megye múltjából II. A késői feudalizmus kora [バーチュ=キシュクン県の過去から 第2巻。後期封建制期], Kecskemét, 1979.
- 9 ケチケメートに限らず、他の都市・市場町においても、17世紀に入ると残された史料の量は格段に多くなる。
- 10 *Káldy-Nagy Gyula*: Kanuni devri Budin tahrir defteri (1546-1562) [立法者期のブダの検地帳], Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Yayınları: 177, Ankara, 1971; *Idem*: A budai szandzák 1559. évi összeírása [ブダ県の1559年検地帳], Bp., 1977 (以下 A budai)。
- 11 *Hornyik*: oklevéltárral, 223 old. kk.
- 12 例えば、*Pach Zs. Pál* (szerk.): Magyarország története 1526-1686. I. köt. [ハンガリー史 1526年—1686年、第1巻], Bp., 1985, 292-293 old.; *Géza Dávid*: Demogra-

- phische Veränderungen in Ungarn zur Zeit der Türkenherrschaft, *Acta Historica* 1988. No. 1, S.79-87; *Szakály Ferenc*: Gazdasági és társadalmi változások a török hódítás árnyékában [オスマン占領下の経済的・社会的変容], Bp., 1994, 21 old. (以下 változások); *Idem*: Magyar adóztatás a török hódoltságban [オスマン支配地域におけるハンガリーの課税], Bp., 1981, 148-158 old. (以下 adóztatós)。
- 13 *Rácz István*: Városlakó nemesek az Alföldön 1541-1848 között [大平原の都市居住貴族 1541年-1848年], Bp., 1988, 27 old.
- 14 *Dávid*: a.a.O., S.85.
- 15 *Káldy-Nagy Gyula*: A budai szandzák 1546-1590. évi összeírásai. Demográfiai és gazdaságtörténeti adatok [ブダ県の1546年-1590年の検地帳。人口統計史と経済史への資料], Bp., 1985, passim (以下 1546-1590)。
- 16 *Dávid*: a.a.O., S.83-84.
- 17 *Szakály*: Die Bilanz, S.66-67.
- 18 表1には掲げなかったが、1580年、90年作成の検地帳も残されており、そこに記載された人口の合計はそれぞれ1,421人と721人となっている (*Káldy-Nagy*: 1546-1590, 347 old.)。
- 19 *Mészáros*: i.m., 200-204 old.
- 20 *Káldy-Nagy Gyula*: Harács-szedők és ráják. Török világ a XVI. századi Magyarországon [ハラージュ徴収人とレアーヤ。16世紀ハンガリーにおけるトルコ世界], Bp., 1970, 160-162 old. (以下 Harács-szedők)。
- 21 *Bálintné Mikes Katalin*: Kecskemét város Tanácsa a XV-XIX. században [15-19世紀におけるケチケメート市の参事会], In: *Iványosi-Szabó*, 7-8 old.; *Peter Sugar et al* (eds.): *A History of Hungary*, Indiana Univ. Press, 1990, pp. 85-89.
17世紀のケチケメートのプスタ経営については、*Hornyik*: gazdasági fejlődésének, 40 old. kk.。
- 22 *Hornyik*: gazdasági fejlődésének, 39-40 old.; *Idem*: oklevéltárral, 340-342 old.
- 23 *Idem*: gazdasági fejlődésének, 66-67 old.
- 24 *Mészáros*: i.m., 72-75 old.; *Szakály*: Die Bilanz, S.66-67.
- 25 *Mészáros*: i.m., 223-224 old.
- 26 *Káldy-Nagy Gyula*: Statisztikai adatok a török hódoltsági terület nyugat felé irányuló áruforgalmáról 1560-1564-ben [1560年-1564年のオスマン支配地域の西方向けの交易に関する統計的資料], *Történeti Statisztikai Évkönyv* 1965/66, 1968, 32-34 old. (以下 Statisztikai)。
- 27 ザーヒングズダについては、第3節で詳述する。
- 28 *Hegyi Klára*: A török adminisztráció és az alföldi mezővárosok [オスマン行政と大平原の市場町], In: *Novák László és Selmeczi László* (szerk.): *Falvak, mezővárosok az Alföldön* [大平原の村々と市場町], Nagykovács, 1986, 320 old. (以下 adminisztráció); *Pach*: i.m., 379, 461 old.
なお、オスマン支配下のハンガリー社会を実態的に取り上げた邦語文献としては、

- 護雅夫「オスマン帝国の遺産」嶋田襄平編『東西文明の交流 3 イスラム帝国の遺産』平凡社、1970年所収、342-389頁がほぼ唯一のものである。ただし、この論考もフェケテの研究に大きく負っている。
- 29 *Bálintné*: i.m., 5-34 old.
- 30 1565年以降、ケチケメートがスルタンに支払っていた税額は20万~30万アクチェ (akçe) であった (*Mészáros*: i.m., 59-61 old.)。
- 31 U.o., 61-64 old.; *Káldy-Nagy*: Harács-szedők, 142 old.
- 32 *Mészáros*: i.m., 67 old. 召還の理由については、*Szakály*: adóztatás, 154 old.; *Hegyi Klára*: Török közigazgatás és jogszolgáltatás — magyar városi autonómia [オスマンの行政と司法 — ハンガリーの都市自治], *Történelmi Szemle* 1985. 2 sz., 234 old.
- 33 例えば、冒頭で紹介した『ヨーロッパにおけるハンガリー人』のシリーズの一つ *Szakály Ferenc*: Virágkor és hanyatlás 1440-1711, *Magyarok Európában II* [黄金期と衰退 1440年-1711年. ヨーロッパにおけるハンガリー人 第2巻], Bp., 1990では肉牛輸出の重要性が大きく取り上げられている。
- 34 *Pach*: i.m., 356 old.; *Paládi-Kovács Attila*: A magyar állattartó kultúra korszakai — Interetnikus kapcsolatok és történeti rétegek, Doktori értekezés [ハンガリーの牧畜文化の時代 — 民族間関係と史的諸階層、博士論文], Bp., 1985 (unpublished).
- 35 *Káldy-Nagy*: 1546-1590, 6-7, 17, 29-30, 41 old.; *Idem*: A gyulai szandzák 1567. és 1579. évi összeírása [ジュラ県の1567年と1579年の検地帳], Békéscsaba, 1982, 18-19 old. (以下 A gyulai).
- 36 *Bruce MacGowan*: “Food Supply and Taxation on the Middle Danube (1568-1579),” *Archivum Ottomanicum* 1, pp. 195-196.
- 37 *Hegyi Klára*: A török birodalom magyarországi jövedelemforrásai [オスマン帝国のハンガリーにおける収入源], *Századok* 1983. 2 sz., 379-380 old.
- 38 *Ö.L.Barkan*: XV ve XVI inci asırlarda Osmanlı İmparatorluğunda ziraî ekonominin hukukî ve malî esasları. c.1, *Kanûnlar* [15-16世紀のオスマン帝国における農業経済の法的・財政的基礎. 第1巻. 法令集], İstanbul, 1945, pp. 300-303.
- 39 *Káldy-Nagy*: 1546-1590, 13, 25, 37, 48 old.
- 40 *Mészáros*: i.m., 87-89 old.
- 41 *Káldy-Nagy*: Harács-szedők, 168, 171 old.; *Idem*: A gyulai, 41-57, 148-164 old.
- 42 *N. Kiss István*: 16. századi dézsmajegyzékek [16世紀の十分の一税台帳], Bp., 1960, 1029-1033 old. (以下 dézsmajegyzékek).
- 43 *Mészáros*: i.m., 191-198 old.
- 44 ケチケメートの羊の保有者については、U.o., 84-90 old.
- 45 *Rácz*: i.m., 25-37 old.
- 46 *Buza*: a “vadszám,” 5-7 old.
- 47 *N. Kiss*: dézsmajegyzékek, 5-13 old.
- 48 U.o., 1039-1040 old. 46. jegyzet.

- 49 *Mészáros*: i.m., 152-157 old.
- 50 *zahin*とはトルコ語に由来する言葉であった。オスマン帝国では20,000オスポラ (*oszipora*=アクチェ) 以上の収入が見込める土地を *ziamet* と呼び、それを保有するスイパーヒを *zaim* と称した。この *zaim* がハンガリー語化して *zahin* となり、富裕なスイパーヒの呼称となった。やがてこれが富裕な市民に対しても、適用されるようになった (*Hornyik: gazdasági fejlődésének*, 102, 158 old.)。
- 51 *Mészáros*: i.m., 153 old.
- 52 表9は1550~60年代の史料に現れる判事や市参事会員の名を拾い上げて作成した (*Hornyik: oklevéltárral*, 223 old. kk.)。
- 53 例えば、*Katona Benedek* は1626年には肉牛125頭と大型牛36頭を、1637年には肉牛245頭を保有していたが、1642年にはナジケーレシュ市に子羊5匹を支払ったり、大量の毛皮を売却したりもしている。同じくナジケーレシュの *Csete Gergely* は肉牛交易で名の知られた人物であったが、数度にわたって市に羊を売却している (*Buza János: "Pusztán hagyott" puszták a XVII. század második felében/Adalékok Kecskemét és Nagykőrös pusztabérleteinek történetéhez/[17世紀後半の「放置された」プスタ——ケチケメートとナジケーレシュのプスタ借地の歴史に関するデータ]*, In: *Bertényi Iván* (szerk.), *Ünnepi tanulmányok Sinkovics István 70. születésnapjára* [シンコヴィチ・イシュトヴァーン古稀記念論集], Bp., 1980, 63-67 old.)。
- 54 *N. Kiss*: *dézsmajegyzékek*, 138-139, 266-267, 351-352, 517-518, 604-605, 1037-1038 old. ここでは、*パラディ=コヴァーチュ*の要約を引用した (*Paládi-Kovács*: i.m., 304 old.)。
- 55 *Belényesy Márta*: *Az állattartás a XV. században Magyarországon* [15世紀ハンガリーの家畜飼養], *Néprajzi Értesítő* 1956, 34 old.
- 56 *N. Kiss*: *dézsmajegyzékek*, 1050-1051 old. 富農の人数の割合だけを筆者が挿入。
- 57 *Buza*: a "vadszám," 41-43 old.
- 58 U.o., 21-24 old.
- 59 近年ハンガリーでは、近世期の肉牛輸出に関する研究を、単に一握りの大商人たちだけから説き起こすのではなく、牛の飼養から輸送、売却・購入、商人間のネットワークなどの全てを含んだ「組織体」を想定し、これに係わる人間全て——牛飼いから大商人まで——を考察の対象とすべきであるという考えが提出されている (*Szakály: változások*, 9-13, 27-28 old.)。しかし、この見方に立ったとしても、この17世紀に貧困化する社会層は肉牛輸出とは係わりがないために、考察の対象となることは永久にあり得ないのである。
- 60 牛追い(ハイドゥー)については、拙稿「ハイドゥー研究における『断絶』と『不整合』——近世ハンガリーにおける社会集団ハイドゥーへの“定説”を踏まえて——」『史潮』新29号, 1991年, 61-74頁(以下『断絶』と『不整合』); 同「ハンガリーにおけるハイドゥー研究: その課題と展望——ナジとダーヴィドゥの二論文の比較を通して——」国際基督教大学『社会科学ジャーナル』第30号(3), 1992年, 117-142頁に詳し

い。

- 61 *Fenyvesi László*: Kecskemét adózó férfinépességének személynevei (1546-1562) [ケチケメートの男子納税者の個人名 (1546年-1562年)], *Magyar Nyelv* 1989. 1 sz., 71 old.

検地帳の上では、記載された姓名の後ろにmの文字が付されている。カールディ=ナジはこれを mücerret(独身の)の略と取るが、フェケテなどはかつてこれを mezbur(上記の)の略として読んでいた(*Halasi-Kun Tibor*: "Sixteenth-Century Turkish Settlements in Southern Hungary," *Bulleten* 28, 1964, p.6 n.1)。ここでは一応カールディ=ナジの考えに従ったが、1562年の検地帳などではフェケテの考えに従っても何ら支障は生じない。と言うよりもむしろ、後述の、筆頭記載者とそれに併記された息子、兄弟、家僕との密接な関係を考えると、mezburと解した方が自然であるようにも思われる。

- 62 *Káldy-Nagy*: 1546-1590, 348-349 old. メーサーロシュは、66人が逃亡し、内64人が家僕(szolga)であったとしている(*Mészáros*: i.m., 183-191 old.)。
- 63 U.o., 154 old. 56. táblázat. を参照のこと。
- 64 ボルショドやヘヴェシュの村では、羊飼いは平均10~30匹の羊を管理していた(*N. Kiss*: dézsmajegyzékek, 1048 old. 73. jegyzet.)。
- 65 *Mészáros*: i.m., 182-183 old.
- 66 相対立する見解は、以下の箇所にも見出すことができる(*Paládi-Kovács*: i.m., 321 old.; *N. Kiss*: dézsmajegyzékek, 1047-1048 old.)。
- 67 羊の保有者が多く住むケチケメートのナジ通りには、羊飼いや多く記載されている(*Káldy-Nagy*: 1546-1590, 348-349 old.)。
- 68 *Takáts*: i.m., 279 old.
- 69 羊飼いの種別については、取り敢えず *Buza*: a "vadszám," 39-40 old.。
- 70 *Takáts*: i.m., 261-262 old.
- 71 U.o., 294-295 old.
- 72 *Bán Péter* (szerk.), *Magyar történelmi fogalomtár* II. köt. [ハンガリー史概念辞典, 第2巻], Bp., 1989, <vlachok>, 255-256 old.; 伊東孝之ほか編『東欧を知る事典』平凡社、1993年、<アルーマニア人> <ブラフ>の項、17-18、438-439頁。
- 73 萩原直「ルーマニアの民族と文化」南塚信吾編『東欧の民族と文化』彩流社、1989年所収、175-177頁；同「バルカン民族問題の淵源——アルーマニア人の民族的アイデンティティを求めて——」聖心女子大学キリスト教文化研究所編『東欧・ロシア——文明の回廊』春秋社、1994年所収、39-42頁。
- 74 *Takáts*: i.m., 296-297 old.
- 75 *Ferenc Szakály*: Serbische Einwanderung nach Ungarn in der Türkenzeit, In: *Ferenc Glatz* (ed.), *Études historiques hongroises* 1990. 2., 1990, S.27-28 (以下 Einwanderung); *Idem*: Serb bevándorlás a török kori Magyarországra [オスマン時代のハンガリーへのセルビア人の移住], In: *Glatz Ferenc* (szerk.): *Szomszédaink között Kelet-Európában. Emlékkönyv NIEDERHAUSER EMIL 70.*

- születésnapjára [隣人に囲まれた東欧で。ニーデルハウゼル・エミル古稀記念論集], Bp., 1993, 80-81 old.(以下 bevándorlás).
- 76 *Takáts*: i.m., 296-297 old.
- 77 U.o., 297-298 old.
- 78 *Paládi-Kovács*: i.m., 254 old.より所引。
- 79 *Pach*: i.m., 458 old. ちなみに、モハーチ以前の時代のセルビア人の人口は約 20 万人 (旧ハンガリー王国領内の人口の 5~10%) と言われている (*Szakály*: *Einwanderung*, S.23; *Idem*: bevándorlás, 77 old.)。
- 80 *Szakály*: *Einwanderung*, S.25-29; *Idem*: bevándorlás, 78-83 old.
- 81 *Szakály*: *Einwanderung*, S.27-28; *Idem*: bevándorlás, 80-81 old.
- 82 *Káldy-Nagy*: A gyulai を参照のこと。
- 83 1697. ápril. 28. Városi jegyzőkönyv [市政記録]. (*Takáts*: i.m., 260 old. 1. jegyzet. より所引)。
- 84 *Szabó*: i.m., 95-97 old.
- 85 *Szakály*: *Einwanderung*, S.30; *Idem*: bevándorlás, 83 old.
- 86 *Mészáros*: i.m., 103 old.
- 87 U.o., 103-114 old. 同職組合の設立を求めた金細工師たちは全てセグドからの避難民であり、当時ケチケメートには金細工師の同職組合は存在しなかったために、セグドと同種の規約を持っていたデブレツェンに規約の転写を依頼することになった。
- 88 U.o., 112 old.
- 89 毛皮加工師の同職組合の規約の全文は、*Hornyik*: oklevéltárral, 280-282 old.に掲げられている。
- 90 論争の概要を知るには、*Hornyik*: gazdasági fejlődésének, 82 old.; *Káldy-Nagy*: Harács-szedők, 159-160 old.; *Fekete Lajos*: Budapest a törökkorban [オスマン時代のブダペシュト], Bp., 1944, 184-185 old. (以下 Budapest)。
- 91 回暦 976 年ズー・アルヒッジャ月 20~30 日 (=1569 年 5 月 6~16 日) 付の特許状 (*Hornyik*: oklevéltárral, 283 old.)。
- “... a megölt bárányok bőrét tulajdonosaik nem nekünk, hanem más idegeneknek adván el, ...”
- 92 日付不詳の意見書 (U.o., 283-284 old.)。
- “... részint mivel az ottani szűbők közül némelyek a szücs és szabó mesterséget egyiránt folytatják, ...”
- 93 同上 (U.o., 284 old.)。
- “... a félben hagyott mesterség nem jövedelmezvén, arra: hogy a család ön fentartásától elmozdítottassék, törvény nincs.”
- 94 回暦 988 年ズー・アルヒッジャ月 (=1580 年 12 月) 付の特許状 (U.o., 285 old.)。“... ama szücsök szokásai ezen túlra is az eddigi gyakorlat szerint érvényben maradjanak.”
- 95 日付不詳の意見書 (U.o., 286 old.)。

“Ha a szabók a szűcs mesterségben ügyesek, saját mesterségök elhagyását a törvény nem tiltja.”

- 96 回暦 998 年ラビー・アルアッワル月 10～20 日 (=1590 年 1 月 17～27 日) 付の文書 (U. o., 286 old.)。
- “... régi szokás szerint, (törvényes igazoló íratot kérnek arra nézve,) hogy egyiknek a másik mesterségébe avatkozni ne lehessen.”
- 97 *Mészáros*: i.m., 108-118 old.
- 98 *Szakály Ferenc*: Magyar kézművesség a 16. századi hódoltsági mezővárosban [16 世紀のオスマン支配地域の市場町におけるハンガリー人の手工業], In: *Nagybákay Péter és Németh Gábor* (szerk.): V. Kézművesipartörténeti Szimpózium. Veszprém. 1984. november 20-21 [第 5 回手工業史シンポジウム、ヴェスプレーム、1984 年 11 月 20-21 日], Veszprém, 1985, 17-28 old. (以下 Magyar kézművesség).
- 99 *Szakály*: Magyar kézművesség, 7-9 old.; *Mészáros*: i.m., 96 old.
- 100 *Szakály*: Magyar kézművesség, 9-10 old. (ただし、掲げられている 1590 年の数字は、1659 年 2 月の文書の数字との混同がある。); *Mészáros*: i.m., 111 old.
- 101 *Hornyik*: oklevéltárral, 271-279 old.; *Mészáros*: i.m., 102-108 old.
- 102 *Fekete Lajos*: Die Siyâqat-Schrift in der türkischen Finanverwaltung. I Bd., 1955, S.288-291 (以下 Siyâqat).
- 103 *Káldy-Nagy*: A budai, 173 old.
- 104 *Mészáros*: i.m., 95-103 old.
- 105 U.o., 108 old.
- 106 *Fenyvesi László*: A magyarországi balkániak etnikailag heterogén kézműves társadalma (15-17. század)[ハンガリーのバルカン人の民族的に混在化した手工業者社会 (15-17 世紀)], In: *Nagybákay Péter és Németh Gábor* (szerk.): VI. Kézművesipartörténeti Szimpózium. Veszprém. 1988. november 15-16 [第 6 回手工業史シンポジウム、ヴェスプレーム、1988 年 11 月 15-16 日], Veszprém, 1989, 143-145 old.
- 107 *Hornyik*: gazdasági fejlődésének, 82 old.; *Mészáros*: i.m., 111-112 old.
- 108 *Szilády Áron és Szilágyi Sándor*: Okmánytár a hódoltság történetéhez Magyarországon I.köt. [ハンガリーにおけるオスマン支配史史料集. 第 1 巻], Pest, 1863, 285-299 old.
- オスマン政府から免税などの特権を認められた組織・集団は、その特権を楯に、都市内にあっても、都市の指導部への従属を拒否することが多く、共同体としての都市の一体性を危うくすることもあった (*Hegyí*: adminisztráció, 311-312 old.)。
- 109 毛皮加工師の同職組合は、1659 年に組合規約の認証を副王ヴェッシェレーニ・フェレンツより賜っている。このことは、オスマン勢力の後退を印象づけると同時に、都市の首長である判事の権威が、16 世紀には国境の向こうに退いていた領主権力の下位に、再び位置づけられたことをも意味した (*Szakály Ferenc*: Az alföldi mezővárosok és a magyar feudális hatalom <XVII. század> [大平原の市場町とハンガリーの封建

- 権力 (17世紀)], In: *Novák és Selmeczi*, 337 old.)。
- 110 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業——国際商業ネットワークの変動を中心に——』岩波書店、1991年、433-434頁。
- 111 *Vlad Georgescu: The Romanians. A History*, Ohio State Univ. Press, 1991, pp.25-26.
- 112 *Mészáros*: i.m., 147 old.
- 113 *Szakály Ferenc* (szerk.): *Szigetvári Csöbör Balázs török miniatúrái (1570)* [シゲトヴァーリ=チェベル・バラージュのトルコ風ミニアチュール (1570年)], Bp., 1983, 23 old.
- 114 ジェレプケーション制については、*Bistra Cvetkova: Les celep et leur rôle dans la vie économique des Balkans à l'époque ottomane (XV^e-XVIII^e s)*, In: *M.A.Cook* (ed.): *Studies in the Economic History of the Middle East from the rise of Islam to the present day*, Oxford Univ. Press, 1970.
- 115 *Caroline B. Finkel*: "The Provisioning of the Ottoman Army during the Campaigns of 1593-1606," In: *Andreas Tietze* (Hrsg.): *Habsburgisch-osmanische Beziehungen*, Wien, 1985, pp.114-117 (以下 Provisioning); *Eadem*: *The Administration of Warfare: the Ottoman Military Campaigns in Hungary. 1593-1606*, Wien, 1988, pp. 178-189 (以下 Administration).
- 116 *Finkel*: Provisioning, pp. 114-117; *Eadem*: Administration, pp. 184-185.
- 117 *Takáts*: i.m., 318 old.; *Gecsényi Lajos*: *Az Edlaspereg-tügy — A magyar kereskedők bécsi kapcsolatai a 16. század első felében* [エドラシュペルグ事件——16世紀前半におけるハンガリー商人のウィーンとの関係], *Történelmi Szemle* 1993. 3-4 sz., 288 old.
- 118 *İstanbul, Başvekâlet Arşivi, Mühimme defteri* [重要事項記載文書] No. 3.
「汝の伝えてきたところによれば、羊がトランシルヴァニアからウィーンへ運ばれてしまうために、兵士たちやムスリムたちは食肉の件でひどく切迫しているとのこと。故に汝は、上記の者たちが十分な量を手に入れぬ間は、羊を持ち出さぬよう要請してきた。故に余は以下のような処置を講ずるものとする。すなわち、兵士やその他の者のために、羊を運んでくる者からは、時価で十分な量が購入されるべし。羊を運んでくる商人には、時価で支払い、決して彼らに損害を与えることのなきように注意すべし。」(*Káldy-Nagy*: *Statisztikai*, 36 old.; *Idem*: *Harács-szedők*, 124 old.より所引)。
- 119 *Vass Előd*: *Vác 1560. évi török vámnapló* [ヴァーツの1560年のオスマン通関日誌], *Studia Comitatus* 3, Szentendre, 1975, 142 old. 論末にオリジナルのハンガリー語訳あり。
- 120 *Káldy-Nagy*: *Harács-szedők*, 124 old.; *Idem*: *Statisztikai*, 31-32, 36-37 old. (ただし、37頁の2月の輸出頭数4,404は誤りで、4,406である。). 後者の論末には、オリジナルのハンガリー語訳が付されている。
- 121 *Vass*: i.m., 142 old.; *Káldy-Nagy*: *Statisztikai*, 37 old.
1560年9月に400枚の羊皮、300枚の子羊の羊皮、同10月には400枚の羊皮、130

- フォリント相当の毛皮、25 フォリント相当の子羊の毛皮が輸出されている。1563/64 年には、約 3,700 枚の子羊の毛皮、2,380 枚の羊皮、1,600 枚の毛皮、589 枚の子羊の羊皮が輸出されている。
- 122 *Pach*: i.m., 344-345 old.; *Vass*: i.m., 141-142 old.; 上掲拙稿『断絶』と『不整合』、62-64 頁。
- 123 *Finkel*: Administration, pp. 186-187. ちなみに、前出の 1563/64 年のヴァーツの入金簿において、都市名が明示された羊の輸出記録は 1 カ所のみであり、それによればツェグレードから 1,000 匹の羊が Nagy Bálint によってもたらされている (*Káldy-Nagy*: Statisztikai, 55 old.)。もちろん、羊の長距離搬送の例としては、本稿の注 118 で示唆されているような、トランシルヴァニア地域からウィーンへのような例もある。
- 124 *Turbuly Éva*: Sopron város mészároszékének tevékenége számadáskönyvei tükrében 1567-1593 [会計帳簿に見るショプロン市の屠殺業者の活動 1567 年-1593 年], In: *Nagybákay Péter* (szerk.): VIII. Kézművesipartörténeti Szimpózium. Veszprém. 1992. november 9-11 [第 8 回手工業史シンポジウム, ヴェスプレーム, 1992 年 11 月 9-11 日], Veszprém, 1993, 119 old.
- 125 *Finkel*: Administration, pp. 130-143.
- 126 *Hornyik*: oklevéltárral, 34-35 old.; *Idem*: gazdasági fejlődésének, 100 old. 116. jegyzet.
- 127 *Finkel*: Administration, pp. 177-178.
- 128 *Mészáros*: i.m., 66-67, 84 old.; *Pach*: i.m., 351 old.; *Sugar*: op.cit., p. 87.
- 129 ハンガリー領内に駐屯していたオスマン軍の総数については、*Pach*: i.m., 455 old.; *Sugar*: op. cit., p. 87; *Hegyi Klára*: A várak és katonaságuk szerepe a török magyarországi berendezkedésében [オスマンのハンガリー一定着期の城塞とその兵士の役割], In: *Bodó Sándor és Szabó Jolán* (szerk.): Magyarországi végvárak a XVI-XVII. században [16-17 世紀のハンガリーの国境城塞], Eger, 1983, 72-74 old.
- 130 *Finkel*: Administration, p. 173.
- 131 例えば、フェケテも 1/5 クツイエ (Qıyye=オッカ) (*Fekete*: Siyâqat, S.738-739 Anm. 15.)、ムルゲスクも 17 世紀末のそれを 260 g としている (*Bogdan Murgescu*: "The Ottoman military demand and the Romanian market. A case study: 1672," *Revue des Études Sud-Est Européennes* 1987. 4, p. 308)。ペルイエーシュはそれを 300 g と換算している (*Géza Perjés*: "Army Provisioning, Logistics in the Second Half of the 17th Century," *Acta Historica* 16, 1970, p. 12)。
- 132 *Sztefan Andreev*: Török iratok Temesvár XVII-XVIII. századi történetéről a Szófiai Nemzeti Könyvtárban [ソフィア国立図書館所蔵の 17-18 世紀のテムシュヴァール史関連のオスマン文書], *Levéltári Közlemények* 1978, 195-214 old.
- 133 16 世紀のショプロンでの肉牛の平均体重が 387 kg であった点などを参考として、肉牛 1 頭から得られる牛肉を 300 kg として計算した (*Pach*: i.m., 344-345 old.)。
- 134 羊 1 匹の体重を 10~15 kg として計算した (*Finkel*: Administration, pp. 188-189)。
- 135 *Timár György*: Királyi sziget. Szigetvár várgazdaságának iratai 1546-1565 [国王

- の島。シゲトヴァールの城塞経済文書 1546年—1565年], Pécs, 1989. 多種多様な肉類が購入されているが、羊肉と明記されたものは僅かである。
- 136 ヨーロッパの食肉消費に関しては、取り敢えずヴェルナー・レーゼナー、藤田幸一郎訳『農民のヨーロッパ』平凡社、1995年、208—209頁を挙げておく。
- 137 *N. Kiss István*: Die demographische und wirtschaftliche Lage in Ungarn vom 16-18. Jahrhundert, *Südost-Forschungen XLII*, 1983, S.209.
- 138 *Szakály*: Magyar kézművesség, 28 old.
- 139 *Káldy-Nagy*: Harács-szedők, 169 old.
- 140 *Fekete*: Budapest, 222-223 old.; *Vass*: i.m., 140 old.
- 141 *Barkan*: op.cit., p. 301.
- 142 *Vass*: i.m., 140 old.
- 143 *Turbuly*: i.m., 120 old.
- 144 U.o., 119-120 old. ショプロンは、1592年の3月から6月、93年の2月から3月の期間にも895頭の肉牛を購入し、内847頭を市内で屠殺している (U.o., 121 old.)。
- 145 *Fekete*: Budapest, 295-296 old.; *Idem*: *Siyâqat*, S.263 Anm. 51.
- 146 *Hornyik*: gazdasági fejlődésének, 71 old.
- 147 例えば、フランドル地方やイギリス、スペインにおける羊の重要性がすぐにも想起される。
- 148 *Suraiya Faroghi*: Labor Recruitment and Control in the Ottoman Empire (Sixteenth and Seventeenth Centuries), In: *Donald Quataert* (ed.), *Manufacturing in the Ottoman Empire and Turkey, 1500-1950*, State Univ. of New York Press, 1994, p. 31.
- 149 *Fikret Adnir*: Tradition and Rural Change in Southeastern Europe During Ottoman Rule, In: *Daniel Chirot* (ed.), *The Origins of Backwardness in Eastern Europe. Economics and Politics from the Middle Ages Until the Early Twentieth Century*, 1989, pp. 144-146. 耕地を放牧地に転換した一因には、穀物価格の低落もあった。
- 150 *Péter Gunst*: Agrarian Systems of Central and Eastern Europe, In: *Daniel Chirot*, pp. 73-75.
- 151 *Norbert Benecke*: *Der Mensch und seine Haustiere. Die Geschichte einer jahrtausendealten Beziehung*, Stuttgart, 1994, S.237. マリア=テレジアとヨーゼフ2世によって、メリノ種は1775年と1786年に、ハプスブルク領内、ハンガリー領内に導入されている。
- 152 Ebd., S.228; *Mészáros*: i.m., 84 old.; *Belényesy*: i.m., 34 old.; 永田雄三「歴史上の遊牧民——トルコの場合——」永田雄三・松原正毅編『イスラム世界の人びと—3 牧畜民』東洋経済新報社、1984年所収、200—203頁などを参照のこと。

The Early Modern Society of Kecskemét—an Agro-Town in Hungary: Aspects of Sheep Farming and Its Related Industries

Hiroshi TOYA

The aim of this paper is to broaden the current image of Kecskemét, an agro-town in Hungary, in early modern times. Since the 19th century onward, not only the history of Kecskemét but also that of Hungary as a whole have been mostly investigated with special emphasis on their connections to Western Europe. This is why studies on cattle exports have been encouraged in Hungarian historiography. However, this is an one-sided approach.

Kecskemét was not only a center of cattle export, but also one of the largest sheep farming agro-towns in early modern Hungary. Through our survey of sheep farming and its related industries, we could uncover significant connections between Hungarian and Ottoman/Balkan society. Concentrating our survey on the Kecskemét case, we have paid special attention to several aspects surrounding sheep farming, i.e. the numbers of sheep in Kecskemét, sheep owners, shepherds, furriers' guild, mutton supplies and its consumption. In this article these aspects are discussed respectively. If cattle can be regarded as a tie between Hungary and Western Europe, then sheep might be acknowledged as the one between Hungary and Ottoman/Balkan society.

In the mid-16th century around 15,000 sheep were raised in Kecskemét. More than half of them was owned by a limited number of relatively rich strata, i.e. by *zâhingazdák* (the richest stratum) and the second richest stratum, comprising a small percent of all tax payers. Majority of sheep owners belonged to the latter. According to the data of three *tahrir defteri*, i.e. descriptions of provincial surveys of the *Buda sancak* (a subdivision of the province), there had been documented only two to ninety-two shepherds in early modern Kecskemét. However, the numbers were obviously underestimated. We may well estimate the number of shepherds in Kecskemét at 150—239 based on the size of territory and the quantity of raised sheep.

Owing to the table 6 and 8, we consider it highly probable that tax payers' sons and single brothers worked as shepherds. On the other hand, Rumanians and Southern Slavs immigrated into Hungary in early modern times, and they used to be called *vlachok*, i.e. shepherds, but we have found enough proofs to consider that there was no established ethnic specialization in the engagement of sheep husbandry, since not only Rumanians and Southern Slavs but also Hungarians engaged in sheep farming.

In 1559 a furriers' guild was firstly founded in Kecskemét, which was the second oldest guild in this town. All furriers registered in the *tahrir defteri* of 1559 are

supposed to have moved to Kecskemét from other districts. Violation of furriers' professional domain by tailors gave rise to a long controversy between them. As regards furriery, it has been claimed that the furriery in Hungary was brought in from the Balkan area as early as in the 15th century.

In early modern Hungary mutton was mostly dealt with in the following four manners; 1) exports, 2) temporary requisitions and purchases in war time, 3) supplies to (mainly Ottoman) garrisons, and 4) consumption in cities and towns. In the 16th century about 20,000 soldiers were stationed in Hungary. Since one soldier was provided with meat at about 256g per day, meat was daily consumed up at least by 5,120kg just at military fortresses. This amount of meat is equivalent either to 17—18 head of cattle, or to 341—512 head of sheep. Therefore, sheep satisfied the demands of Ottoman troops and sustained plenty of lives as well in the cities where many Muslims lived.

Taking all these aspects surrounding the sheep farming into consideration, we have come to the following conclusions.

In Hungary, the sheep farming was an established subsistence activity which was connected with and open to the south, where there was a huge culture area of sheep farming, i.e. Ottoman/Balkan society. Hungary was not only part of this culture area, but was also included in Ottoman/Balkan network system — social, economic, and military networks. And Kecskemét was extendedly bound with this culture area and its network system as well.